

264

22



始



IF 6D-3

264-22



學校
教師
論

大正
1. 26
内交

264

22

序

私が此の論文を書かうと思ひ立つたのは、去年の秋、學校を止めた時であつた。直ぐに書きたいと思つたけれど、種々の事情に妨げられ、又私の心も動搖して、今年の夏になるまで、どうしようかと思ひつつ打過して來た。この夏上京して、大島さんや、市川さんに、私の此の考について御話をしたら、書けたら書いて下さい、本社で出すことにしますからと云はれる。それからいよいよ書く氣になり、東京から歸つて後に、稿を起して一ヶ月餘りかかつて脱稿したのであつた。

書きはじめた時は、終まで全力を打込んでやるつもりでゐたが、それはとうとう出来なかつた。この僅かの間にも、私には持前の氣分と思想との動搖があり、又私は一方に書きつつも、一方に私の思想の進展を追ひ、疑惑にもぶツかつたりしなければならなかつた。私はこの間に、二つの仕事をしてゐたことになつたのであつた。

そういふことから、全體が一つの調子で貫かれなくて、私の氣分の動搖が、この論稿の上にも影響してゐることと思ふ。驅けるやうにして書いて行つてゐるところもあり、沈んで滯つて、あやふやに筆を運んでゐるところもあるであらう。私の癖である感傷的な調子の滲み出て、讀む人にいやな思ひをさせるやうな個處も多いことであらう。餘りに自分の事を云つたり、自己批評に過ぎたりして、甚だ面白くないところも出来たかも知れぬ。

『學校教師論』と題しはしても、半分は私の自叙傳見たやうになつてゐるが、これはむしろ私のはじめからの計劃で、私は概念的に學校教師を論ずるのでなく、私自身の經驗に即して、行けるだけ一般論にも及ぼさうといふのであつたから、有りふれた此種の論著とは、大分趣きを異にしてゐるのである。

私の此の稿の成るのを、一日千秋の思ひをして、待つてゐて下さつた人が、方々にあつた。私は其の人々の期待に應ずるだけの仕事を爲し得たかどうかは、自分で

は保證し得ない。只だ私自身には、この仕事に對して、まだ多少の不満足が感ぜられないではなう。

猶又、私は中等教師であつたばかりで、小學校教育の經驗はない。だから、私の論述は、中等教師や、中等教育に偏してゐることを免がれない。私の此書を読んで下さる人々の多くが、小學教師諸君であらうと思ふのに、私はさういふ人々に充分の満足と與へることは出来ないであらう。しかし、もともと、此論述は、客觀的に教育を論ずるのでなく、寧ろ私自身をあらはさうといふ考から出来たのであるから、人々は、私といふものを通して、學校教師なり、學校教育を視ることをして頂きたいのである。それによつて、何物か自分自身に觸れるもののあることを、人々は見出して下さるであらうと思ふ。教育の概念について述べる人は外にいくらもある。私は不完全な形であつても、生きた個體化した教育といふものを、人々の前に提供してみたかつたのである。

此の論稿は、私の十三年間の、學校教師の終りと、これから何をするにしても、とにかく人間として生きたいと望んでゐる、その首途との分岐點に、私自身のために私自身が建てた、紀念塔とでも云ふべきものである。又いはば、私の人生飛行における。着陸場であつて、更にこれから飛ばうとしての滑走場に立てた碑文なのである。これが私の未來に、どういふ生涯を展開してくれるか、それは私にも分らない。

又、私が此の稿に筆を執りはじめた時には、之を讀む人に何か教へるところのあらやうに、といふ心が私にはあつた。けれど、之を書き上げてしまつた時には、私は之を讀んで下さつた人から、教へて貰はなければならぬといふ心が、私に残つた。私自身をかうして目の前にひろげた時、今更のやうに、私はその散漫と不徹底とを見なければならなかつた。けれど、それは同時に、現代の人の心の散漫であり、不徹底であるのだと思つた。そして私はいろ／＼なものを寄せ集めてはゐるけれど、

何れも自分のものではなかつた。其の中に只だ一つ私のものがある。その一つの事を、私はこれからやりつづけなければならぬのだと思つた。

私が此の稿を終へた前日の午後、所澤を發した陸軍の四飛行機がプロペラのうなり高く私が之を書いてゐる家の上を飛び過ぎて、北の方の山際の平野に着陸した。そして翌朝早く、又久留米の大演習場をさして翔つて行つた。遠くからも近くからも、幾萬の人が集つて來て、之をみてゐた。私はただ、筆を置いて、室の窓から眺めてゐただけであつた。

大正五年十一月

著者

目次

一、序論	一
二、健康論	一二
三、病患	二一
四、教授論 教育學の教授	三六
五、教授者の態度 教師の研究	四九
六、教師の智識と人格	六九
七、専門の學者と學校教師	八三
八、個性論	九八
九、人格教育と學校教育	一一九
一〇、生死の問題	一三七

の

- 一一、教師と生徒との接觸……………一四四
- 一二、藝術としての教育……………一五九
- 一三、用意と不用意……………一七〇
- 一四、教師の權威……………一八二
- 一五、愛……………一九七
- 一六、求めて止まざる心……………二一九
- 一七、人は何に依りて生くるか……………二三一
- 一八、人をして其の志を遂げしめよ……………二四四
- 一九、老人と青年……………二五八
- 二〇、不平と苦悶……………二六四
- 二一、職業としての學校教師……………二七六
- 二二、絶對と相對……………二八三

- 二三、第一人者……………二九五
- 二四、世間知らず……………三〇八
- 二五、横井小楠の教育法……………三一九
- 跋……………三三五

學校教師論

三浦修吾著

一 序 論



私は、師範學校教師として、十三年間を送つて來た。そして、今私は、その學校教師といふ生活と一度離れねばならぬこととなつた。これから、私は何をするのであるか分らない、けれど、もつと、人間として透徹した生き方をしなければならぬと思つてゐる。私は、學校教師としては、その行き得られるところまで、徹底して行くことができなかった。それでも、私の過去の十三年間は、私としては、あらゆる苦痛と努力との生涯であつた。眞實の學校教師たるべく、私の爲し得るあらゆる試みはなされた

のであつた。けれど、その結果は、つまりは失敗であつて、私は一應、これまでの生涯をとぢなければならぬこととなつた。しかし、かうした失敗は、更に新たな道程への力をはらんだものであることを、私は強く信じてゐる。私の前途は未知數である。私は再び歩みを新たにしなければならぬ。

十三年間の、苦しみの多かつた生涯にあつて、私は、學校教師といふものを觀、考へ、又自から經驗して來た。私はそれらをまとめて、私の過去十三年の結びともし、又これからの發程の、前もつての備へともしやうと思ふのである。

私は、一般的に、學校教師といふものを論じて見たいのであるが、しかし、概念的にそれを論述しやうとは思つてゐない。「私自身の經驗を、一度明るみへ出して、それを、學校教師といふものの眞髓に向つて、押

し進めて行かうと思つてゐる。出来るだけは、一般論に及ぼすつもりではあるが、大體は、具象的な敘述にして、これを、私自身の學校教師論たらしめやうと思ふのである。此の種の問題を、全く概念的に説く人は、他にいくらでもある。私は私自身の仕事をしななければならぬ。

さて、學校教師として、行き得べきところまで行かうとする、私の行路の大なる妨げとなつたものは、私の健康であつたのである。だから、私は何よりも先に身體の健康のことから述べてかからなければならぬ。

何よりも先に、私は身體の健康といふことについて述べなければならぬ。それは、健康は、すべてのものの基で、人間の求めるものは、生活の幸福にあるが、その幸福は身體の健康によりてもたらされる。健全の精神は健全の身體に宿るのだといふ事や。人は人と爲らねばならぬ。

身體の健
康

一番大きな問題

人と爲る前に、まづ動物であらねばならぬといふやうな見地からのみ、私は之を説かうとするのでは無い。それは、十三年間、私にとりての一番大きな問題が、健康といふことにあつたので、此の問題が、又種々の他の問題を包含してゐたからである。

最も大なる重荷

私が、教師としての生活を、私が希ふところまで、押し進めて行かうとするのに、最も大なる重荷となつて、私の歩みを遅々とさせたのは、私の健康の薄弱なことであつた。

不健康の仕合せ

私は、人間にとりて、健康が、必ずしも最大重要なものとは思は無い。健康のすぐれ無いといふことが、其の人の生活にとりて、健康であるより以上の仕合せであるといふことを、首肯しなければならぬ場合がある。又、人間の精神は、身體によつて支配されるものではあるが、精神力が身體の不健康に超越して、より大なる働きをするといふことも事實

である。私の思想が、もつと大きく開かれてゐたならば、私は自分の薄弱な肉體を乗り越えて、私の希ふ以上のところまでも、教師としての私の歩を進めることが出来てゐたのかも知れない。だが、少くも、過去十三年間の私は、教師としては、薄弱の身體に悩まされ、躓づかされて歩いて來たのであつた。

私の幼時

私は幼少の時から、身體は極めて弱かつた。憶病で氣の小さかつたことや、甘やかされて育つて來たといふことが、私の身體を一層薄弱にしてゐる。私は物心のつく頃から、病身であつたことを思ひ出す。私の幼時の思ひ出は、内氣と氣儘と、寒胃と咽頭加答留と、腸胃の煩ひとのみで、充たされてゐると云つてもよい。幼時の思ひ出は、私の心を躍らさない。何人の自叙傳を讀んでみても、其の幼時には、太陽が輝いて、花が咲いて、鳥が歌ふて、蝶が飛んでゐるのであるが、私の幼時の思ひ出は、

冷たい淋
しい思ひ
出

學校教師論

六

藪蔭のジメ／＼した、冷たい淋しい思ひ出である。私は小供の時のことを思ひ出すと、何をやる元氣もなくなつてしまふ。

中學にはいり、師範學校に學ぶやうになつてから、私の行動は一變して、諸種の運動遊戲に、大なる興味をもつやうになつた、それは學友の感化でもあつたが、主として、私の其の頃愛讀してゐた、少年園といふ雑誌の感化であつた。此の雑誌が、私の運命を支配したのであつた。今日の私の生活の内容は、全く此の雑誌によつて、其のはじめを作られたのである。若し私が、此の雑誌を見るやうな機會に出逢つてゐなかつたら、私の生活は、今日とは全く違つた方向に進んでゐたのであらうと思はれる。私が運動好きになつたといふのは、此の雑誌によつて感化されたところが、一番多かつた。私はとう／＼運動家になつた。登山、遠足、擊劍、弓術、短艇等の第一撰手とまでなつたのである。それから、極々

少年雑誌
の感化

各種運動
の第一選
手となる

運動は健
康を齎ら
さなかつ
た

薄弱であつた私の筋骨は、メキ／＼と發達して行つた。けれど私は充分の健康者にはなることが出来なかつた。私の内臓機關は、何時も何處かに欠陥をもつてゐた。其の爲めに、學生として、充分の勉強をなすことは出来なかつたのである。

運動が身體には一番好い。運動より外に健康をつくるものは無いと思ひこんでゐた私は、他に何等の考慮も無く、何等の教へられるところも無く、ただ／＼運動に熱中した。加之、普通運動家の精神に伴生して、運動熱を一層刺激する一つの動機が、私をも驅り立てるやうになつた。それは虚榮心である。人に見せびらかしたい。人に勝りたい。負けたくない、これらは、青年者たる私には、強烈な刺激であり、誘惑であつた。これが、私の精神に、白蟻のやうな巢をつくつて、私の精神に腐蝕を與えたばかりで無く、私の身體の内部をも壞すやうになつたのである。餘

運動家の
通弊

序論

七

りに猛烈で、急激に行つた運動は、私の健康をつくら無いで、却つて私の不健康を増したといふ結果になつた。私共は、指導者からも、盛んに運動を奨励された。そして私はいつても、さういふ人から嘉納されてゐた。私は得意であつたのである。けれど、私共は、運動についての最も大事な心得といふことを承知してゐなかつた。私共は、運動の根本義といふことについては、全く盲目で、只無茶苦茶に動き廻つたに過ぎ無かつた。之れの爲めに、運動は、私の人格の上に何の足すところもなくして、私の健康は却つて破られるようになったのであつた。

茗溪の高等師範を卒業して、薩南の師範學校に職を奉じてから、私は運動家としての教師生活を二ヶ年送つた。其の終り頃から、私の健康には、甚だしい缺陷の徴が萌しかけてゐたのである。

私は、中國の或る師範學校に轉勤を命ぜられた。此の時から、私は劍

健康の第一善運動の根本義を知れ

師範學校の教師となる

薩南から中國へ

健康次第に衰ふ

道の指導者としての外、何等生徒に卒先して運動をすることのできない程、もはや健康が衰えて來て、その劍道の指導さへ、次第々に思はしからぬやうになつて行つたのである。

發育さかりの、元氣旺盛な、兒童や青少年者を教育する人は、彼等が最も喜ぶところの、遊戯、運動、たまには、**わ、る、ふ、さ、げ**の中にはいつて、生徒たることも、教師たることをも、互に忘れて、投げ合ひ、揉み合ひ、駆けあひ奪ひあひをしなければならぬ。彼等に優つた體力と氣力とをもつて彼等を率ゐ、彼等を統御して行くといふことは、教師としての最大權威をもつことである、命令も、感化も、かうした威力の中から、何等の抵抗もなしに、彼等の中にはいり込んで、彼等を内部から動かすものである。幼いもの年若いものを、其の性格の根底から教育しやうといふのには、教師は、彼等の最も喜ぶことを伴にしなければならぬ。喰ひ盛

教師の最大權威

りの青少年者を教育するためには、彼等と共に喰ふの機会を多くもたなければならぬ。

運動家であることと
教師の資格の
根本がない

かう云つたからとて、運動家でありさへすれば、それで、本當の教育が出来るといふのでは、もとより無い。其の根底には、教育的精神が活きてゐなければならぬ。ただ其の精神が、彼等の群を、遠く離れて、側から見てゐただけでは、彼等の内部に働いて行きやうがないのである。だけれど、教師の精神のありやう一つでは、教師の身體が弱くして、かうした生活を彼等と共にすることができない場合でも、勿論、其の強い影響を彼等に及ぼすことは出来るものである。

又、被教育者が、智識思想の上に生活するやうになり、思索といふやうなことが、彼等の根本要求となつた時、たとへば、師範學校の上級の

知識が生
徒の根本
要求とな
つた時

生徒の場合などになると、單に教授者としてでも、大なる教育的影響を彼等に及ぼすことが出来るやうになるものである。

二 健康論

何時までも平教員でゐたい

高等師範を出る時、私は、かういふ考をもつてゐた。それは私の性格と嗜好にかへりみ、又教育の精神を考へてしたことで、私は、校長や、教頭や、舎監などになることは、努めて避けるやうにしたい。むしろぢかに生徒に接觸することのできる平教員でゐて、私自身の思想信仰趣味を養ひ行きつつ、生徒の内部生活を指導啓發することをしたいといふのであつた。私には、教育者だといふ自覺よりも、彼等を教ふる人、教師であるといふ意識の方が強かつた。彼等の全人を導いて行く教育者だといふ、大きい精神自覺は、私にはなかつたのである。私は、教育學科の教師として、はじめて薩南の學校に招かれてから、爾來十三年間、それを押し通して來るやうになつたのである。

全人の教育者と學科の教授者

自分で、教育學科を教授して居ながら、かういふものが、將來小學校の教師になるものに、どれだけの必要と價值とがあるであらうかと、私は疑つてゐた、私はこの學科の教授に、骨折るだけは骨折つたが、しかし此の疑をはなれることはできなかつた。其のうちに、私は、現行の師範學校における教育學教科の内容に眼を注ぐやうになつた。教育の學科に價值がないのではない。かういふ體裁の教育學の智識を、彼等に詰め込む必要がないのであると私は考ふるやうになつた。それから、私は彼等に價值のあるやうな教育學の智識を、まづ私の頭の中に形成しやうと思ひ立つた。そして、眞に彼等の血肉となり、生命の糧となるやうな教育學の教授をしてみたいと希つた。其の爲めには、私は多大の研究努力をしなければならなかつた。私の健康の不充分なものと、氣力の乏しいのとは、此の方面に於て、大なる邪魔となつたのである。私にとりてのよ

教育學改造の必要

教授は教師の人格の表現である

り大なる苦痛は、これであつた、私は、彼等の前に立つて、自由自在に私自身を充分に表現することのできるやうな、心地よい教授をすることが出来なかつた。寧ろ多く躓きがちで、何時も淺薄な、間に合せの兎もすると胡麻化しの教授に成り終ることが多く、生徒も不満足なことであつたであらうし、私自身も、極めて心細く感じた。もうかういふ努力は擲つて、月並の教授に満足しやうかと思ふことさへ度々あつた。けれど、それは私にはどうしても出来ないことであつた。

教授に氣合が乗らない、力が籠まらない。それは又一つには、不健康がもととなつた、神経質な私の氣分から來たものであつた。教授者としての教師に、一番必要なものは、大洋のやうな、のびやかな氣分である。大きい腹である。如何なる時でも、溫顔をもつて生徒に對することである。清濁ともに併せて呑むの襟懷をもつて、彼等をわが内に包み込むこ

大洋のやうかのびやかな心

生徒の性質のさま

とである。どんなに手を盡してみても、理解をよくしない出來のわるい生徒もあるであらう。根性のひねくれたもの、つむじの曲つたもの、何かにつけて教師に反抗を試みるやうなもの、途徹もない質問をしかけて教師を困らさうとばかりしてゐるもの、様々な性質のものが、彼等の中にはあることであらう。顔附のいかにも憎らしさうなものもある。居眠りばかりしてゐるものもある。教師の顔を見ては、あざ笑つてゐるやうなものもある。毒々しい言葉附のものもある。さういふものをも、一切、溫かいわが胸の中に抱き込んで、いつも變らぬ平靜な態度で、彼等に對するのでなければ、教育が出来ないばかりで無く、教授も徹底するものではない。教師が腹を立てたり。氣持を損したり、陰氣な顔をしたのでは、管に教師の權威がそこなはれるのみではない。さうした教師に接しては生徒の心の上にも曇りがかり、彼等の心性の上にも、醫し難い傷がつ

平靜を失はぬ教師の態度

教師の情
調は生徒
に大なる
影響を有
つ

く。精神が疲勞してゐたり、消化がわるかつたり、血行に不調なことな
どが、教師の身體にある場合には、些細の行き惱みから、教師の心情に
變調が生じて来る。それが顔にあらはれる。と電光のやうに、それは生
徒の眼を射て、忽ち彼等の心調に不愉快な影響を及ぼす。殊に、神經質
な、内気な生徒などが、教師のこの顔色、この眼に行きあたると、彼等
の性格は、一層變な、すくんだものになつて行く。

教室は
太陽の如
く光の輝
きも輝き
の如く輝
きも輝き
ぬばい
ら

これ位、教育に悪い影響を來すものは無いであらう、ところが教師の
健康がすぐれない時には、このいやな現象が、しばしば教室内に起るの
である。教場内は、いつも太陽の光に輝いてゐなければならぬ。そこに
は生徒の平靜和樂の氣分と、活動の力が漲り充ちてゐなければならぬ。
生理作用の順調な、充分に健康な身體を有する教師でなければ、かうい
ふ零圍氣を、彼等に與えることは出來ないのである。

強壯と健
康とは別

此の事に於て、私は第一の失敗者であつたのである。教師としての私
自身の最大な苦痛はこれであつた。これが、私の接して來た多くの若い
心に、どれだけよくない印象を與えて來たことであらう。弱い私は、
このいやな氣分に打勝つことができなかつた。

私が、教師は健康で無ければならぬ——強壯で無くてもよい——といふ
わけの、其の第一なもの、之れであるのである。教師は強壯で、運動
場で、生徒と力の角逐をすることができ無くともよい。この平靜な氣分
だけは、瞬時といへども亂さないやうにするでなければ、教師としての
生命を全うすることはでき無いのである。之れは、學識よりも以上に、
教師によりて心せらるべきものである。この平穩な心の態度さへ、たし
かに保ち得たならば、教師の其の他の短處は、之によつて償はれて餘り
があるのである、學識よりも、教育にもつと必要な、教師の知慧は、こ

學識以上
に教師に
よりて心
きせらる
べきもの

運動家多
くは不健
康者

の平穩の心から、時に應じ變に臨みて、自然に湧いて出て來るであらう。此の氣分は、運動家たる人が、必ずしも持ち得るものではない。それは、運動家は、いつも健康なものとはいはれないからである。否、事實は、多くの場合、運動家は不健康者であることを語つてゐる。

自分で健康の勝れてゐない私は、どうして健康といふものは得られるかといふやうな事は述べないことにしよう。それは、ここには最も大事な問題であるけれど、私は之を他の人に譲らなければならぬ。

不健康な
教師の有
育つ強い教
育力

だが、生徒と運動を共にすることの必要を説いた時に云つたと同じやうに、こゝでも私は、健康の上に立つものは精神であるといふことを云はなければならぬ。病身であつたりしては、教師としての第一資格が缺け、それでは教師としては價值がないのであるかといふと、必ずしも左

様ではない。教師の精神のありやう一つでは、病者といへども、力強い教育的影響を生徒の上に及ぼして行く事が出来るのである。

沈痛な戦
闘的氣分

健康な教師は、すら／＼と安らかな態度で、生徒にすら／＼と安らかな心持で勉強して行くことのできる力を與える。是れは甚だ希はしきことである。だが、教師が病身である場合、常に旺盛な精神力で、肉の苦痛と戦ひつゝ、それに打克ちつゝ進んで行くといふ態度は、又生徒に別種の感化を與えるもので、力強い、沈痛な、引き締つた、戦闘の氣分を彼等に示すものである。生徒が師範學校の上級生などであつた場合には教師のこの内的苦闘が、彼等に底深い力の感じを與えるものである。此の戦闘の中から、絞り出されたやうな、教師の實感の聲は、彼等の魂の髓の髓にまでも喰ひ入つて行くやうな力をもつもので、彼等の魂の奥底に力の發動を感じさせることが出来るのである。

底深い力
の感銘

病身の教師といへども、決して失望してはならない。彼の病苦に堪える精神の力は、普通の健康者では、知り得ない、到り得ない、人格の力を生み出すもので、それに宗教的又は道義的の信念が加はつた場合には、何人も企て得ない、人を動かすの力となつて發現するに至るであらう。

私は、私のこの論に聽いて下さる人々への、參考までに、私が十年近くの間、戦ひぬいて來た病苦の經歷をあらまし御示し、やうと思ふ。

三 病 患

私が病苦
と戦つて
來たあら
まし

私が、教員生活に入つてから、二年ばかりを過ぎた頃、私はもう三十を眼の前に控えてゐる歳であつたが、其の頃から、人生に對する疑問がしのびやかに私の心に迫つて來るやうになつた。それは其の頃の二十歳前後の青年がもつてゐる煩悶と同じ傾向のものであつた。私の煩悶は、私の性格に相應して、決して深刻熱烈なものではなかつた。燃えるやうな悶えではなかつたけれど、淡いながらに執拗なものがあつた。私はこの問題が私に解決されるでなければ、何事にも全我をひつさげて當つて行く事が出來ないやうに感じられた。今まで何でもなしに私の眼に映じてゐた、自然人生の事象が、皆謎となつて私に迫るやうになつて來たのである。今まで春光の下を徐歩してゐた私は、いつの間にか落寞たる冬枯

の野に、風に吹かれながら立つてゐるのを見出したやうなものであつた。私はどうかしなければならなかつた。私は何處へか往かなければならなかつた。

神を知り
たい

私は、神を知りたかつたのである。神を知るでなければ、私は何事にも満足を見出すことができないやうになつたのである。今まで、詩趣で満足の出来てゐた私は、もうそんな事では安んずることが出来なくなつた。私は、私の精神のあり得る限りで、宗教に思ひを潜めてみた。信仰の友も私には多く出来た。けれど、それから私は何物をも獲ることが出来ない。私の天地は暗灰色に曇つてしまつたのであつた。

薩南から、中國に移るとき、私はこの憂ひを抱いて來たのであつた。これと殆んど前後して、私の健康が徐々として衰えて來るを覺えた。私は疲れることが多いやうになつた。鬱ぎ込むことが多いやうになつた。

私の發病

其の上に、取越苦勞や、無用の心づかひをさへするやうになつた。何でもないことに心を痛めるやうなことがあるやうになつた。氣分が悪くて打臥することさへあるやうになつた。學校の仕事には、いよ／＼力がは入らぬやうになつた。明治三十八年の夏である。私は、とう／＼熱を出して、打續き床に就かねばならぬことになつた。冷たい但馬からの風が吹いて來て、歳があけて、四十年になつた時には、私は全く動くことが出来ないやうになつた。そして、春になつて、私の病氣が、重症の肺結核であるといふ宣告を、醫師から下された。そしてもうよくはならない。二年位はもつてあらうけれどといふ事であつた。私を診察した三人四人の醫師が、皆同じことを言つた。

病氣は不
治との宣
告

此の宣告を與えられた時には、私はづきんと胸を突かれた。大地が壊れて、私はその暗い中に落ち込んだやうな氣がした。私の前途は暗黒に

ななつてしまつた。墨の様な色の雲が、私の前を一面に鎖してしまつたのである。

死にたく
ない

私には、生命に對する強い執着があつた。死にたくなかつた。生きて居たかつた。私は、私の腕一つで、養ひ支えて行かなければならぬ、妻と、二人の幼児と、老母とに思ひ至ると、心は一層重いものに壓えつけられるのであつた。

或る夜、妻の口から―妻も涙を落して―醫師の宣告が私に傳へられたとき、私は思はず、床の上に起き上つて、ちつと室の一方を見詰めた。兩脇からは汗がバラ／＼と流れ落ちた。私は何にも言ふことが出来なかつた。

暗黒の中
に煌めく
一道の光

室の一隅を見詰めたまゝ、數分間。私は、私の前途の黒雲の中に、一道の電光のひらめくやうなを感じた。一大決心が、電流のやうに、私の全身に震ひ傳はるのを覺えた。私は俄かに笑顔になつて、妻に答えた。「宜

憂き事の
上ほ此の
かし積れ
あし限り
ある身の
力試さん

しい、どんな悩みでも来い、私はどれ丈の事に堪え得るか、試してみるのだ」之をきいた 妻もニッコリとして涙を收めた。

私は、大敵を控えた勇將のやうな心持を感じた。乾坤一擲の大勝負を決するのであるかのやうな、強い心持を感じた。どうして、こんなに強い決心が、私に出来たのか、それはたゞ不可思議といふ外はなかつた。

私は、熟々と自分の有様を考へた。私は私の精神のあり得る限りの力で、神を求めて来た。けれど、それが獲られない。私にはもう方途が盡きてゐたのである。どうしたらよいか、もう分らなくなつてゐたのである。其處へ、この突然の大難。これは私の生涯に、深い意味のあることであらうと思ふ。私には、神を求めると最後の方途が與えられたのではなからうか。私は此の難儀に堪え、此の苦痛を味はつて行くことによつて、私にとりてなくてはならぬ最大唯一のものが與えられるのではな

最も價値
ある最も
意深き
天より
賜物の

からうか。この大患は、私にとりて、最も貴重な天の賜物では無いであらうか。

私は左様であると信じた。鹿の洞水を求めて喘ぐやうに、私が久しく求めて止まなかつた、其の御姿を、私に見せて下さらんがために、神が私に授けられた深奥の學問であつたのだと、私は信じた。それから私の心は和やかになつた。もはや戦前の將軍の心持ではなくして、探究者のやうな心持に私は變つて來た。あゝ、私が切に求めてゐたものが與えられるなら、私はもう其處で死んでもよいのだ。其れを學び知るためのこの病氣であるのなら、もし私がそれを知り得たら、其の時から、病氣は治るのかも知れない。けれど、私は死んでもよいと思つた。朝ニ道ヲ聞ケバ、タニ死スルモ可ナリとの孔子の言葉が、思ひ出され、私は其處に安んじてゐることが出来るやうになつた。

戦前の將軍の心持は、探究者の心持に變る

其の時から、私の病氣の経過は、豫想外に良好に向つて來た。醫師は、その考を立て直すやうになつて來た。驚いてゐた。この分ではよくなるか知れませぬといふやうになつた。

五月、青葉の榮ゆる頃となつた、私は障子を明け放つて、椽側に蒲團を出して、其の上に仰臥してゐて、晴れた蒼い空と、そこに浮んで動いてゐる白い雲と、それらを一面に強く照らしてゐる日光とを眺めてゐた。庭の樹も、森の梢も、青々と勢のよい若芽を出してゐる。日光の下にあつて、それが力強く、日々に生長して行く。此の頃まで蕭條として褐色に枯れゐた、庭の隅にも、草の青い芽が、活き／＼と其の莖と葉とを展ばす。蟲が喰つて、もう朽ち果ててゐるかと思はれる老樹の幹からまで、若々しい小枝が、すく／＼と生えて來る。

五月の空

毎日、この景色を眺めてゐた私の心に、或る日、ふと喜ばしい音づれ

天地は力
と生命と
に充ちて
ゐる

が、ひびいて來たのである。それは大自然からの消息であつた。天地は力と生命とに充ちてゐる。庭陰の垣根の小草にも、老い朽ちた幹の中にですらも、この天地の生命と力とは、行き亘らぬところ無く流行してゐる。萬物は悉くこの天地の力を受けて、有らん限りの生命を生きてゐる。天は物を殺しはしない。天は萬物を活かすものである。

私も、その萬物の一つではないか、あの庭の雑草や、あの老木にまで充ち渡つてゐる天地の生命は、私の中には流行してゐないのであらうか、小さき草木をさへに、かくまてに生かしてゐる大自然の力は、私をも強く生き返らさないものであらうか。

私の内に
通ふ大自
然の力

さうだ、さうだ。私も又生き返るのである。生き返らねばならぬのである。私の内にあの自然の生命が通ふてゐる限りには、若い私はまだ死ぬべき筈はなかつた。私は生き返らざるを得ないのであつた。私の心に

は、五月の日光のやうにうららかな、若葉のやうに力強い氣分が漲るやうになつた。

病氣にな
つたから
地から私
は抜けた
かれた草
の様なあ

私は何故に病氣になつたのであらう。それは、私の魂が、天地の生命から離れてゐたからである。大自然の力の流入を、私自からの心で、塞ぎとめてゐたからである。私は地から抜かれた草のやうに、枯れかけてゐたのであつた、私は私の魂の根を、しつかりと、天地の生命の中に植えつけねばならない。

私の心は、どんなに喜びに躍つたか分らない。どんなに力強さを感じたか分らない。私は程なく、起つて森の下、野の上を歩くことが出来るやうになつた。

青天の霹
靂

六月が來た。夏の盛りに近づいて來た。と、青天の霹靂、光つたと思

ふ間もなく、雷霆は私の頭上に落下したのである。私が柱とも杖とも頼んでゐた、唯一人の私の看護者、私の妻が、突如として大患の犯すところとなつたのである。其の時の私の心の混亂を、私は書きあらすことはできない。暗い潮が寄せて来て、私を深淵の中に捲き込んで、ぐるぐると底の方へ沈めて行くかのやう。私はどうすることもできなかつた。親戚のものが来て、妻を病院に運んで行つた。二人の子供は、二處に各々別々に引きとられて行つた。私はたゞの一人になつてしまつたのである。それから私は自炊生活をしなければならなくなつた。かうして暑い夏は苦しい悲しい淋しい中に過ぎて行つた。秋が來た。冬が近くなつた。森の梢に、ぞつとするやうな、うなり聲をひびかせて、私の室を襲ふて來る木枯風は、障子の破れた紙をふるはせて、骨に沁みるやうな音を立てる。起臥の全く自由になつてゐた私は、しばらく、この寒氣をさける爲

秋が來た

木枯が吹
きすさぶ
やうにな
つた

冬に入つ
た

に南の暖かい海岸に行つて、旅館の二階に一人日を送ることになつた。十二月もいよ／＼押し迫つて、二十三日となつた。曉のまだ暗いのに目を覺ますと、枕許には行燈の光りが薄明くともれてゐる。波の音が、さ／＼と枕頭にひびいて來る。私は二三日前から、又突然熱を出して、臥しきつてゐたのである。すると、行燈の光りの明滅する頃、私の咽喉のあたりに變な感じを覺えたと思ふと、こはいかに、多量の咯血は、私の枕邊を眞紅に染めなした。

大事出來

咯血は終日止まなかつた。翌くる日も終日止まなかつた。三日目も同じである。宿の小女が、三度の食事を運んで來てくれる外、誰も私を介抱してくれるものが無い。私は毎日かうして一人で血を咯きつゞけた。私の胸は疼みを感じ、呼吸は迫つて來るやうになつた。醫者には來て貰つたが、お定まりの藥を與えるより外に、術の施しやうが無く、慰める

すべてが
煙の様に
あつた

よすべも知らず、醫師はただ／＼氣の毒がつて、退いて行つた。

やはり私はよくなりたかつた。よくなると信じてゐた。今や、天地の
力も、生命も何處にか往つてしまつたのか。私の望みは、もう、煙のやう
に消えて行つてしまつたのでは無いか。私が努力してきづいて來たもの
はどうなつたのであるか。唇氣樓のやうに、かき消えてしまつたのでは
ないか、死を待つより外に、何が私には残つてゐるか。

譬へやうのない、悽愴の感は、暗雲のやうに私の心をも身をも包んで
しまつた。あゝ、一切が空であつた。一切が夢幻であつた。汝の努力の
跡は、今は何處にあるのだ。

只だ御心
に任せ給
へ

私は、もはや、どうする事もできない。何もかも投げ出す外はなくな
つた。其の時、ふいと、私の心には、基督のゲッセマネの祈りの言葉が
浮んだ『ただ御心にまかせたまへ』すると、ふしぎなるかな。私の心は丁

私の内部
に起つた
不可思議
な光輝

世の常な
らぬ悦び

度濃い霧の晴れて行くやうに明かになつた。一切が、輝いた色をしてあ
らはれるやうになつた。病氣になつたこと、病氣が重くなつたこと、そし
て死をまたねばならなくなつたこと、それが、私には無上の賜物であり、
最上の幸福であつたのだと感じられた。私には、もはや神を知らねばな
らぬ必要もなくなつた、私自身と外界とを隔ててゐた、境がとり去られ
てしまつて、私は、洋々として光り輝く大海そのものであるやうな、私
自身が溶けて、大空と大海との光りみてる中に、擴がつて行つたやうな心
地を感じさせられた。それは世の常の喜びではなかつた。私は、今迄に
経験したことのない心の平穩と喜悅との中におかれた。否、私自身が喜
悦平穩そのものであつたのである。私は、丁度、あたたかい綿にでも包
まれ、宙に浮いてゐるやうな心地を感じた。胸の痛みも、呼吸の苦しきも
忘れはててゐた。私は、私の今日までの生涯に、この時程幸福を感じた

ことはない。私が、どうしてあんなにあり得たか、私にとりては全く不可思議のことであつた。

病氣回復

私は、それから、十日ばかりして、起きて歸つたのであつた。それから、急轉直下といはうか、半年ばかりの間に、私はずん／＼健康を恢復して夏になると殆んど、病の形跡が認められなくなつた程に、快癒してしまつたのである。

人々の驚き

私は、それから又、學校に出て、擊劍の指導をもするやうになつた、みんなの人が不思議があつた。醫師は、そんな筈はないがと云つて、首をひねるものもあつた。けれど、私はとう／＼よくなつたのであつた。

妻の死

妻は、やはり、私と同じ病であつた。まる四年の間、煩ひつづけて、私とは離れてゐて、最後に、私の許に来て、とう／＼失くなつた。奥さんは、あなたの爲めに、犠牲となつて死なれたのですと、多くの人は言

つて呉れた。苦みぬいて來た 妻の臨終は、まことに、靜穩で、崇高なものであつた。

四 教授論 教育學の教授

眞剣な生活

二ヶ年間に亘る私の病中の生活は、ほんとうに眞剣なものであつた。一生懸命であつた、といふより、私は私以上の力をもつて生活してゐた。私は私でないものであるかのやうな力に助けられて、あの大難に克ち得て來たのであつた。

夢のやうに、病は癒えてしまつた、私は又元の教員生活に歸つた。すると又、私は元のやうな、力の乏しい、空疎な、教授を繰り返さねばならなかつたのである。大難と戦つた私は、何處に往つてしまつたのであらう。再び教壇にあらはれた私は、やはり以前の、氣の小さい、軽い浮つべらな私に過ぎ無かつたのである。

前にも述べた通り、私は、私の教ふる教育學といふものを、私自身に

不徹底な生活への逆戻り

價值ある教育學を建設した

も、又教はる生徒にとりても、價值あり、生命あるものとしたかつた。其のために、私は多大の努力をしなければならぬ。

私は、世間に所謂教育學といふものばかりを研究したのでは、私の目的を達することは出來ないと思つた。又教育學を學んだ丈で、教育學は分るものでないと思つた。宗教哲學文藝、乃至は法政といふものにも通曉しなければ、活かされた教育學を建設することはできないのだと思つた。それで、私は、自分の趣味のあるところから、宗教哲學文藝の方面に多く心を注いでみた。しかし、乏しい私の精力で、餘りに手廣く仕事を仕向けて行つた結果は、淺薄な散漫なものになり終つたといふそしりは免かれなかつたかも知れない。

最近の思潮であり、傾向であるからと云つて、獨逸あたりの、教育専門學者の著書を、コンデンスしたやうなものを、師範學校の生徒に授け

現行教育
の無價値

る必要はないと思つた私は、さういふものには、余り重きを置かなかつた。師範學校用の教育學教科書といふものは、悉くがさういふ體裁に出來てゐるので、教科書を生徒に持たせはしても、私は、偶々それを利用するだけで、殆ど重きを置かなかつた。

小學兒童の教師となるものにとりて、成程、現今の教育學といふものについての概念は、教科書を教へることによつて與えることはできやうが、それは大して緊要なものではないと、私は思つた。彼等には、もつと直接に必要なものがある。もつと活きた、實際の教育的事實に、彼等の眼を向けさせて、それを理解して、それからまつまつた概念をも形成させるやうにしなければならぬと思つて、私は、その爲めに骨を折つてみた。師範學校の上級生になると、教科書の中のことは、大抵一人で研究もし、理解もすることが出来るのである。そんなことは、彼等自身に研究

活きた教
育的事實
の研究

不完全で
もよい活
きもいな
らねばな
らぬ

させたらよい事である。私が教授することは、私に就くてなければ、他の何人に就ても、又如何なる書に就ても、學ぶことのできないやうなものでなければならぬ。私の教授には、私といふものが、生きて動いてゐなければならぬ。よしや不完全の儘でも、私の血が、私の教授の中に通ふてゐなければならぬ。私の教育學の教授は、私自身を授けることでもなければならぬ。取り次ぎであつたり、受け賣りであつてはならぬ。私自身のものでなければならぬ。教授の價値は、其の形式が整つてゐるといふ事でなくして、教授者の個性が、其の中に生きてゐるといふことでなければならぬ。かうなるためには、教授者には、非常の熟練が要せられるのである。

私の授ける智識は、生徒の内部に、游離して這入るのではならない。彼等の内部に根をもたなければならぬ。そして、彼等の全思想生活の根

生徒の内
部生命と
なるやう
な智識の
教授

底となり、其の中心動力と爲らねばならぬ。その爲めには、私の授ける所のものは、彼等の内生活の最も深い處に這入つて、外から詰め込まれたのでない、彼等に本來な、彼等自身の思想に、強い結合をもたさねばならぬ。

此の爲には、彼等の内生活に通ずる必要がある。一般の學校の、一般の教授を見ると、少しも此の事は爲されてゐない。教師の授けるところのものは、生徒の脳皮質部に、據所なく、暫時の居を占めるといふに過ぎないで、生徒の内生活とは没交渉である。教育學の教授は勿論のことであるが、生徒に生活の方法を教へる筈の、修身の教授が、みんなさうなつてゐる。教授は、生徒に重荷になることはあつても、其の力にはなつてゐない。生徒は、教師から教へられるよりは其れ以外のものに動かされて生活してゐるのである。

教師は生
徒の内生
活に逆せ
よ

生徒は學
校の教授
以外のも
のによつ
て動され
てゐる

生徒の實
際に彼接
近せよ
等の裏心
け

生徒の内生活に通ずるには、彼等の實際生活に近づいて、彼等の裏心の聲を聞きとる必要がある。これが學校教師には、極めて至難のことと、中等學校では、殆んど此の事は出來てゐないと云つてよい。生徒同志が話し合つてゐることを、生徒が教師の前に出ても話すことが出來、生徒同志でやつてゐることを、教師の前にもやらせることが出來なければならぬが、實際にはこんな事は行はれ得てゐないのである。生徒は教師の前では、内にあるものは隠してしまふ。そして都合のよいやうに取り繕ふたことを、教師の前に提供するといふ習慣になつてゐる。

殊に、師範學校の生徒などになると、其の内生活は複雑して來てゐるので、却々教師の眼に其の真相は見えるものでない。彼等が、教師の前に、その内生活を有りの儘に曝け出すことをするでなければ、教育といふ事は勿論のこと、思想に關係した教授は、眞實役に立つものとして施

師範生
の内生
活

すことは出来ないのである。直接、生徒の性格教養の任に當つてゐる、教師や、修身科を擔任してゐる教師は、務めて、生徒の内生活に通曉することをしてしなければならぬが、生徒の方では、校長とか、舎監とかいふものに對する程、餘計に自己を隠さうとするものである。此の點から、本當に教育をもし、教授をもしやうとするには、學校で餘り重きを置いてない地位にある教師の方が、都合が好いのである。尤もこれは教師の性格と態度とに依ることの多いものであるのは論をまたない。

私は、生徒の前に、自分の品格を墜すやうなことを敢てしても、この事にはつとめて來たのであつた。ところが、私の態度が本來作爲的に出來たのであるから、生徒は却々こつちの思ふ壺にはまつて呉れぬ。私は殆んどこれには絶望しかけて居た。ところが、十年間の苦心は、聊か私に希望の曙光を見せてくれるやうになつた。私はどうやらかうやら、彼

教師の作爲的態度

希望の曙光

等の内生活の機微を隙間見ることが出来るやうになつた。さうすると、私の授けるところのものは、乾ける地に水の吸ひ込まれるやうに、彼等の心に入つてゆくのを見た。更に苦心幾年かをつづけたならば、私は殆んど全く彼等の内生活を支配し得るに至るであらうと思つた。

私は學生で居た頃、神田の青年會館で、名士方の演説をきいたことがあつた。何人がどんな演説をしたのであつたか、忘れてしまつたが、唯一つ、演説者の風采をも、其の演説の内容をも、明瞭に記憶してゐるのがある。それは村上專精先生の演説であつた。先生の演説は五分間ばかりの極短かいものであつたが、先生の態度は謹嚴莊重であつた。演題は、十年といふのであつた。諸君が事を成さうとするなら、十年やり通す覺悟でかからねばならぬ。十年はかゝらねば仕事はできるものでない。そして、十年かゝれば出来ないといふ仕事はないといふ、たゞこれ文であ

村上專精博士の演説

尊重すべき教師の生活

つた。先生は終りに、十年、十年、と二三度力強くくり返された。私はこの演説を忘れることができない。教師の仕事も、單なる一學科の教授に熟するといふ事丈でも、十年はかからねば本當に出来るものではない事を、私は自から實驗したのである。それも同一の學校に十年繼續して働くのでなければ駄目である。あちらの學校に三年、こちらの學校に二年と轉々して、六七年もすると、今迄教授して來たものをなげ捨てて、教頭になつたり、校長になつたりして、馴れも熟もしない、法制經濟や、修身の教授をはじめたからとて、何の功果があるであらう。況して校長の地位にある人が、二年三年づつと、學校から學校へ移動させられるのでは、どうして教育の實績を擧げることが出来やう。私は、校長や教頭になるといふやうな野心をなげうちて、十年以上も平教員であつて、同一學科の教授に、次第に白髪頭になつてゆく人の生活を、崇高な尊重

根本莞爾先生

すべきものだと思ふ。此事について、私は、私共の先輩、根本莞爾先生に教へられたことが大であつたことを云はねばならぬ。私は根本先生にあつたことはない。けれど、根本先生のことを傳へきいたときに、私は教師としての私の方針を示されたと思つて喜んだのであつた。

人知れぬ教師の悩み

いつまでも、地位も俸給も増されなまいふことは、私のやうなものにとつては、たしかに苦痛である。自分の舊同窓が、ずん／＼と自分より先に往つて、奏任待遇になつたり。教頭や校長になつたり、從七位を貰つたりするのを、新聞などで見たときには、淺間しい哉、物寂しいや、な心持を感じずには居られないのである。自分よりもずつと後に學校を出たものが、自分よりもずつと先きに進んで、近くの學校の校長になつてゐるのを見ると、殊にいやな氣持になる。あれだつて、彼の人のやつてゐる位の仕事ならば、いつでもやれるがなあ、などと愚痴っぽい心

教師の克己すべきこと

をひそかに起すのである。けれど、これが學校教師の克己すべきところで、自分の心を回轉させて、より高い、より眞實のものの方に眼をつけて、自己に鞭つことをしなければならぬ。さういふ事のあつた場合、私はよく生徒に云つて聞かすことであつた。吾々は、吾々が與えられてゐる報酬より以上の働きをすることを思はねばならぬ。吾々の地位以上の働きをしなければならぬ。低い地位にゐて、僅少の報酬を得て、或る場合、學校長より以上の仕事をするといふことは、教師の誇りであり、譽れであるのだと、これは私自身の告白であることもあつた。瘦我慢の鬱憤ばらしであることもあつた。そして、私が、得てゐる報酬丈の仕事をして爲し得てはゐないのだ。私が現在に得てゐる報酬さへ、私には過分であるのだと思つては、衷心恥かしさを抑えることができなかった。

私は、お上によつて養はれ、教育され、大した勉強もしないで、學校

報酬以上の働きのせよ

内省して恥ぢる

有難い學校教師の境遇

を卒業させて貰つて、あやふやな學識を獲得してゐるにすぎないのに、中等教員免許状といふものを授けられ、先輩の引立によつて、何等生活上の困難も知らずに、其の日其の日を御茶を濁して、過してゐるのは、余りに勿體なさ過ぎるのではないか。若し、お上の保護、先輩の引立を蒙らないで、獨立獨行、自分の實力だけで世渡りをして行かなければならぬのであつたら、何等のことをもよくし得ない私の如きは、どんななじめな生活を送らねばならぬことであらう。

私は、世の中の労働者や、自分の實力だけで、苦しい生活をしてゐる人を思ふ時には自分の境遇が有難いと云ふよりは、空恐ろしくなつて來る。私の収入の半分にも、又三分一にも及ばない収入で、生活をしてゐる彼の人々の實力に比べたとき、私の實力は、果してどんなものであらう。月給のたゞ取りをしてゐるやうなものである。かう思ふ時、私はい

あゝ幸福
なる學校
教師よ

つも、世の中の奮闘者が、私を睨めつけ、又あざ笑つてゐるやうに感ずるのである。あゝ幸福なる學校教師よ、汝に何の不足があるべきであらう。地位と俸給との増し上げられぬを啣つ前に、汝は、汝の仕事に、世間の勞働者程の努力を捧げ得てゐるかどうかを考へよ。

五 教授者の態度 教師の研究

同情と憐
愍に値す
境遇の
生徒の

私をはじめて薩南の學校に、教師となつた時、私は生徒等の境遇に對して、同情と憐愍とを禁ずることができなかつた。ほんとうに可愛想だと思つた。彼等が持つて生れた潑刺の心といふものは、隅の方に押しやられてしまつて、乾燥無味な學科の暗誦に、その若い胸をも頭をも塞がれてしまつてゐる。彼等がもつて生れた愛の情緒に、あたたまりと光とを與えて呉れるやうなものには、彼等は接觸する機會をもたされてゐない。彼等の心は、石のやうに冷たく固く、小さく、ちぢこまつてしまつてゐる。人間らしい性情は、展びさせられてはゐない。偶々時を許されて、彼等互ひが勝手に遊び回り得るとき、集ひあつて、こそ／＼話してもするときにのみ、隙間を洩るゝ光りのやうに、彼等が天然の性情は、

生徒の本
然の性情
は願みら
れない

隠れて發露するに過ぎないのである。其の美はしい性情のひらめきを、何人もかへりみてはくれない。彼等は、その性情のひらめきを、罪惡でもあるかのやうに、教師の前にはおしつゝまうとする。とりすました顔で、教師の前に出る。

たま／＼、やさしい打開いた心の教師に出逢つたときには、戸が俄かに放されたかのやうに、押し隠された彼等の天真の性情が、一度に、教師に對して、光のやうに流れ出る。彼等の顔は忽ちに輝いて来る。動作が活々として来る。彼等は急に明るい世界に導き出されたのである。

教師は、何故に、斯く／＼の教科を彼等に授けるのであるかを知らないうて授けてゐる。しかく／＼の教科が、彼等の生活、彼等の心性の發達の上に、どういふかゝはりを有つのであるか、さういふことについては、全く盲目で、たゞ少しでも餘計に覺えさせうとばかりして居る。授けた

教師の盲
目的の教
授

生徒の眼
は活きた
自然と人
生に向
つては開
かれない
かたは開
かれない

ものを、たゞよく覺えてくれて、試験の時、答案紙の上に、授けた通りものを出來るだけ間違なく書いてゐてくれさへすれば、教師はそれで満足してゐるのである。自分の仕事は彼等の心性の發達の上に、どういふ作用をしてゐるかなどいふ事は、教師の顧慮するところではない。

生徒は、教科書にかいてあることや、教師によつて講述せられたことを、幾度も復習を餘儀なくされて、大抵は覺えてゐるが、彼等を取り捲いてゐる、自然人生の活きた事象については、皆目不理解でゐる。智識とは、教科書や、筆記帳の中に書いてあるものだと、彼等は思ひ込んでゐる。學問とは、書物や、講義によつて、何事かを覺えることだとばかり彼等は考へさせられてゐる。彼等は、植物學教科書に記載されてあることを、よく暗記してゐる。彼等にとりては、それが植物學の智識であつて、學校の庭の垣根に咲き出てゐる、草の花の名も形態も、その生活状態を

も、それを知らないでも、植物學の智識に、別に缺くる所はないものゝやうに思つて居る。彼等には、教科書や、筆記帳を、くり返し翻讀する習慣と興味とは與えられてゐる。けれど、庭に立つてゐる樹木、それに來て鳴く小鳥、日常眼前に起る出來事、天の現象、世の中にあらはれる人間生活の種々相。さういふものに對しては、彼等は、何等の興味をも、一片の求知心だにも有つてゐない。

彼等の此の有様を見ては、私は、彼等を可愛想に思はぬことは出來なかつた。恰度日露戰當時のことであつた。常陸丸が、玄海沖で、浦鹽艦隊に撃沈されて、世の中が騒いだときのことである。それから數日をたつて、私は試みに此の事を、女子師範部の一學年に向つて問ふてみたところが、一人も其の事を知つてゐるものがなく、私の話をきいて、はじめて眼を丸くして驚いてゐる。それから沙河の會戰のあつたあとで、こ

そんな事
が何時あ
つたのか
全く知ら
ない

れは二學年に向つて、問ふてみた。やつぱり知らない。彼等は遼陽の戰のあつたまでは、おぼろげに知つてゐたけれど、其の後のことはまるで知らないでゐる。

専心でな
らねばな
らぬ

世の中にどんなことが起らうと。新聞にどんな記事が出やうと、そんな事には一切構はないで、ひたすらに學事にいそしむと云ふことは、貴といことである。學生はいろ／＼の事に心を散らしてはならない。専心にならなければならぬ。これは、後に例として引くことであるが、私は、沼波瓊音氏の、徒然草講話の中で、今はもう物故されてゐる。ある篤學の醫學者が、實驗室に閉ぢ籠つて、自分の研究の外には、一切心をふれず、日露戰爭のあつてゐることをも、丸で知らずにゐたといふ話をよんで、得難い貴い人だと感じたことであつた。

しかしながら、私の生徒等が、常陸丸沈没のことも、沙河の會戰のこ

教師に命
ぜられな
ければ何
し得ない

とをも知らずにゐたといふのはそれとは性質がちがふのである。彼等は、教師に命せられたこととてなければ、何事をも爲し得ないのである。教師に問はれたり。試験の問題に出たりすることとてなければ、心をも眼をも向け得ないのである。教師から指圖もされず、試験にも出ないやうな、世界戦争のことなどに、よし世間はいくら騒いで、號外はいくど舞ひ込んで來ても、彼等の氣の附きやうはないのである。

隠されて
る事實
を示され
た時、生
徒の驚異
と喜び

それならば、彼等は、かういふ事には、興味をもたないのかといふと全く左様でない。教師によつて、かういふことが示されたときには、彼等は驚異の眼と喜びの心とを以て、それに向ふのである。彼等は、彼等にとりて、心の躍るやうな事實を、今まで、全く隠されてゐたのである。さういふ心のあることに、彼等は、今まで全く氣づかされずにゐたのである。

子供の嗜好

こんな結
構なもの
を未だ味
はされな
かつた

幼児は甘いものを好む。御伽話を喜ぶ。少年者の内部には、詩的想像や、趣味の性情が、力強く發達しやうとしてゐる。彼等にとりて、歴史や、文學や、又世間や自然現象の美しい物語は、彼等にとりては、甘美な食物、然して此上なき、滋養品である。彼等は學校に學ぶこと幾年、多くの教師について多くのことを教はつて來たけれど、こんな結構なもの、未だ嘗て味はされたことがない、歴史も、地理も、理科も、彼等にとりては、砂を食ふやうなものであつた。本當な歴史や、地理や、自然といふものが、そんなに美妙で、驚嘆すべく、喜ばしいものであるかといふことに就ては、彼等は、それらを知るべき眼をも心をも有らなから、全く無知であつたのである。

私は教師としての私の天職は、この活ける智識を彼等に授け、この活ける世界を彼等に示すことであると思つた。彼等から、その無用の重荷

眞實の世
界に觸れ
させよ

を取り去つてやつて、彼等の心を、眞實の世界に觸れさせて、その本然の發達を遂げさせてやる。これが私の生涯の職分であると思つた。

私は、若い私の心を打開いて、彼等に接した。教場で接觸するだけでは足りない。私は運動場で、彼等に接した。野や山の上で彼等に接した。彼等を家に招いだ。夏の休などには、田舎を廻つて、家々に彼等を訪問した。彼等と共に、山にも登り、旅行をもし、短艇を漕いで、島廻りをもした。

生徒等は
喜んでら
う

彼等はどんなに喜んでくれたであらう。私もどんなに嬉れしかつたか、彼等に擁せられて、海山の景の美しい、磯邊の岩に腰かけて、彼等の喜ぶさまを見てゐたときは、私は彼等のために、生命を捧げてよいと思つた。

困難があ
る

だが、ここにも困難があつた。やさしい事ばかりではなかつた。十六

貪るやう
な生徒の
求知心

七歳頃までの少年を、かうして導くことは、割合に容易であつた。けれど、彼等が二十歳前後になる。彼等の智性が發達して来る。彼等は詩的想像から離れて、だん／＼と理屈がかつたことを好むやうになる。本を多く讀むやうになる。教科書の内容や、教師の講義に満足を感じなくなつて来る。貪るやうに、ついつて來た彼等の求知心は、彼等を驅つて、若い精力の有らん限り、雑多の書籍を涉獵する。疑問を抱くやうになる。教師の言ふことなどは、もう、まどろつこしくて、聞く氣がしなくなる。教師に聴くよりは、自分で本をよんだ方が、どれ丈よいか分らない。本を書いた人は、先生よりは、偉い人である。本の中のことは、先生の話や、講義よりも、面白くて價値がある。居眠りをさせられに、教室に行つて、究屈な思ひをするより、そつと失敬して、教場に出ないで、一人で本を讀んでゐたくなる。師範學校の男子の三年や、四年になる

先生に聴
くよりは
本を讀
む方が
よい

と、大抵かうである。

薩南から、中國に移つた年の夏であつた。私は、近くの女子師範學校を參觀に行つた。そして圖書室に入つてみた。そこには、大きな帳簿が二三冊あつて、生徒が圖書をよんだあとで、其の感想をこれに記入させることにしてあつた。私はそれを披げて讀んでみた。そして都會近くの學生は、かうまでに其の頭が進んでゐるのかと驚いた。彼等は、だいぶ高級な哲學や文藝の書を、あさりよんでゐる。そして、ずいぶんと突き込んだ質疑や、感じを書き認めてゐる、もとより彼等の頭腦は、偏頗な發達をしてゐて、半可通をふり廻してゐる。生意氣なところもあるであらうが、しかしさうばかりといふことは出来ないやうに思はれた。眞摯なところも到る處に見えた。かうなつて來た生徒を、自分は指導し得るであらうかと危ぶんだ。

女子師範學校の圖書室

頭の進んだ女學生

村上專精博士と女學生

それより少し前のことであつた。煩悶を抱いたある女學生が、村上專精氏に之を訴えて手紙を出した。專精氏は、すぐにそれに答えられた。その往復の手紙が讀賣新聞に出てゐるのを讀んだことがあつた。其の女學生といふのは、この師範學校の二學年の生徒であつたといふことを、此の時に知つた。專精氏の返書を得た女學生は、甚だ満足することが出來ず大にこぼしてゐたとの事である。

かうなると、私共教師の薄弱な智識と、低劣な識見とでは、到底彼等を導くことはできない。それが出來ないやうになつては、教師としての我等の立場はどうなつて行くのであるか、生徒が、自分の學校の先生に満足し得ないで、書籍を涉獵するまではまだしも、遣り處のない其の疑惑や煩悶を、學校以外の人に訴ふるやうになつては、我等は何をしてゐることになるのであるか。

學校教師の立場がなくなる

教師は第一流の思想家で、有り得ないからうけ

學校教師論

六〇

元より我等の力に極限がある。學校の教師は世の中で、第一流の思想家でもなければ、學者でもなく、況して偉人といふものでは有り得ない。我等が解決を與え得ないやうな疑惑を、生徒が抱くといふことは、教師としては、寧ろ喜ぶべきことである。教師は、價值ある書籍、又は古今の人物中のすぐれた人を指示して、生徒をして、それに就かしめるといふことは、教育の最良方法の一である。けれど、教師は、生徒のさうした内生活には、無理解、無關係で、生徒が勝手にさういふことをするやうになつては、學校教師の價値、學校教育の權威が疑はしいものになつて来る。

教師に人
生智識が
必要

私は、私の天職が甚だ困難なるものであることを覺えた。私は、有り觸れた、月並の教育學の智識などはどうでもよい。私は、人生智識を養はなければならぬ。そして、教科以外のところで、生徒をでき得る限り

生徒間の
讀書熱

指導することを試みなければならぬ。

病氣が癒えて、再び學校に歸つて來た頃の生徒には、目に立つ程讀書熱が盛んになつてゐて、それがみんな哲學や、宗教や、文藝のものである。其の讀書熱は、歳と共に盛んになつて行つた。圖書室が充實して來るばかりでない。彼等は、一圓以上も、二圓以上もする本をも自分の金で買ひ求めて、読み耽つてゐる。消燈時が來ると、ひそかに蠟燭をつけてよんでゐるものがある。教場に出で、教師の目を偷んで、机のかけでよんでゐるものがある。

教授に充た
つた生徒の内
心の空虚

私には、だん／＼と生徒の内部消息が分るやうになつて來た。彼等は學科や、訓話や、修身の教授では、到底充たして貰ふことのできない、内心の空虚を抱いて、其の渴望に悩まされてゐる、それに堪えられないで、之を充たさう、充たさうといふ、止むに止まれぬ衝動に驅られて、

衷心の欲
求を充た
したい

無暗矢鱈に、雑多の書籍を涉つて、耽讀する。此の頃の學生の讀書は學
課の參考によむのでなく、又娛樂のためによむのでもなく、大抵が、何
物をか獲たい吾が衷心の欲求を充たしてくれるやうな、何物をか求めた
いといふ動機からである。

勿論、彼等は、何等の批判もなしに、ただ／＼耽讀するのであるが、か
うして得た思想は、彼等に對しては、存外に有力で、彼等の生活行動に
底深い動機を與えてゐる。もとより、彼等は學校の規律の中に住んでゐ
るので、其の規律に従つて動作すべく餘儀なくされてゐるが、其れは心
からするのではない。その規律の届かないところでは、彼等は、彼等の
思ふ儘の行動をする。

修身の教授や、教師の教訓よりも、彼等は、現時有名な思想家の著書
の内容によつて、より多く動かされてゐる。學科の智識や、技能やは、

根本の教
育は學校
以外のも
のの外に
移つて手
に取る

人格の根
本からの
教育

學校で授けられてゐるが、彼等の生活の根本信念は、學校以外のものに
よつて養はれつつあるのである。教授は、學校でなされてゐるけれど、
根本の教育は、却つて學校以外のもの手に移つてゐるのである。

單に、學科の智識を授けるばかりでなく、生徒を其の人格の根本から
教育しやうといふのには、教師は、時流に後れない、出來得べくんば、
時流を抜いた識見思想を抱いてゐて、生徒の内部生活の根底に手を着け
なければならぬ。教師は、間斷なき眞面目の研究をしてゐるでなければ
ば、到底其の職を全ふすることは出來なくなる。

小學校の兒童などの場合は、教師の行爲の模範が最も有効で、習慣づ
けられ易く、従つて行動をさせる。行爲によつて教育をするといふこと
が、教育の根底をなすものである。中學校や、師範學校の生徒の場合と
いへども、やはり同じではあるけれど、生徒が、前に述べたやうな状態

行爲の教
育

納得が出
來れば實
行が出来
る

學校教師論

六四

に進んで來ると、寧ろ、彼等の思想を啓發してやるといふことが大事になつて來る、彼等の年齢になると、本當に納得の行つたことならば、人に強ひられないでも、自から實行するやうになるものである。彼等が教師の云ふ通りにしないのは、其の云はれたことが、言葉のまゝに、其の頭には這入るけれど、彼等を本當に納得さすことが出来てゐないからである。知行合一といふことは、何處までも眞理である。親に孝行をしなればならぬことは分つてゐるけれど、それが出来ないといふのは、うそである。成程、親に孝行をしなればならぬといふことを、人に聞かされて、記憶はしてゐるであらう。けれど、理解はしてゐないのである。親孝行と衝突し矛盾するやうな、觀念や欲求が、意識の中に根強く位置を占めてゐて、親孝行といふ觀念の行動に出でやうとするのを牽制してゐるのである。親孝行をしなればならぬことは知つてゐても、その

肥憶して
ふること
解ふこと
別ることは
理

どうした
ら解きた
せること
か出来る

出来ないのは、我儘をしたいといふ欲求が、それよりも強く一方に構え込んでゐるからである。美しい着物や、旨い食物が眼先にちらつてゐる人には、親孝行の大切なことを、百遍さかされても、その實行はできるものではない。親孝行をさせやうといふのには、其の人の意識の根底に、最初から根をはつてゐて、其の人の生活の根本基調をなしてゐる、美服や美食に對する觀念に、手をつけて、それを動かしてかゝるでなければ出来るものではない。よく理解させるといふことは、ただ何遍も説き聞かしたといふだけでは、必ずしも成功するものではない、それも、心の極單純な人であるか、又は、恰度佛様の前に坐つたときでもあるかのやうに、其の人をして、自分を全く信賴させることが出来るときには、こちらの云ふことが、其の儘其の人の内部に這入つて、すぐに其の人の生活全部を支配するやうになるものであるが、教師に、それだけの威嚴

小學兒童の心と青年學生の心の差

がなく、生徒の心が、前に述べたやうに、複雑になつて來ては、それは仲々行はれにくいことである。幼兒の心は單純で空しいから、教師の言葉が這入るとすぐ、それが實行となつてあらはれる。心の貧しい信者が、自分の信ずる人に接したときには、其の人の片言隻句までが、その信者の心に入つて生命となる。教育が、かういふ工合に行けば言ひ分はないのであるが、今日の學校の有様では、それは出來難い。

生徒の本具の思想を捉えよ

だから、教師は、生徒の生活の根本基調となつてゐる、彼等に本具の思想や欲求といふものの消息に通じて、それに觸れ、それを突き動かし、それに結合させ、それに本當の眼をつけてやるやうにして授けることが出來れば、別に行動の習慣を與えずとも、眞に納得させ、理解させることが出來て、彼等をして行爲に出でしめることが得るのである。それをしないで、只、めくら滅法に、訓戒を頭冠せにするから、何の効能もな

教師の技倆

いばかりか、時に反抗心を起させたりするやうになるものである。

教師は、生徒が種々の方面から得てゐる、種々の思想に通じてゐて、それを自由自在に操つて、彼等をして、眞實の方向に、其の思念を向けさせる丈の、智識と技倆とをもつてゐたいものである。教師は、不斷に生徒に接觸し、又絶えず、自己の思想を練つてゆくことを怠つてならぬ。

しかし、以上に述べたやうな研究なり、努力を、學校教師の何人もが、試みねばならぬのだとは、私は言はない。學校の教師には、數學だけを教へてゐる人がある。博物だけを教へてゐる人がある。さういふ人々が、生徒の思想の實際にも通じ、生徒によつて愛讀されてゐる書物の内容にも通じてゐなければならぬといふのでは無い。しかし、直接生徒の思想に關係のある學科、たとへば、修身科とか、國語科の教授を擔任してゐるやうな人は、これだけの努力はしてみるでなければ、其の教授が、眞

生徒の思想に直接關係ある教科

實有効なものにはなり得ないであらうと思ふ。少くも一學校に、一人位は、さういふ事に、興味と努力とを有ち得る教師があつて欲しいと思ふ。

六 教師の智識と人格

生徒は存
在に對し
て權威を
感ずる

生徒は實
に事實に
對し權威
を感ずる

中等學校などでは、生徒は教師を馬鹿にしてゐるやうで、其れは一面事實であるが、又彼等は存外に教師に對して權威を感じてゐるのである。何と言つても、生徒はやはり教師の言を最も重んじてゐる。ただ頭の發達した上級の生徒で、本を多く読んでゐるものになると、教師の智識が薄弱で、其の思想に味ひがないときには、倦き足りなさから、教師を輕蔑するやうになるのである。若し教師の言ふところが、自分が平生に讀んで感心してゐた事と匹敵する程であつたり、又それに上越すやうであつたりする場合、特に教師が其等を自在に利用し得るのを見た場合には、生徒は兎もすると教師を實價以上にも尊敬するやうになる程、教師といふものは、彼等にとりては重いものなのである。同じ言葉や思想である

教師の根本の力は

ときには、彼等は無論、教師以外のものの口又は書物より出たものよりは、教師の口から出たものの方に、價值をも權威をも感ずるのである。若し又生徒が教師の人格を信じきつてゐる場合には、教師の片言隻語も、何ものにも勝りたる力を以て、彼等の内部に這入り、彼等を動かすに至るもので、どうしても學校教師の根本の力となるものは、其の人格であると言はなければならぬ。

何でも知つてゐる必要はない

教師は、何事をも知つて居なければならぬといふものでは無い。自己の専門とするものに就ては、勿論充分に悉知してゐなければならぬわけであるけれど、これさへ、其の枝葉の詳細なことをまで、いつも暗んじてゐなければならぬものではない。知らぬことがいくらかあつて差支ないのである。

教師の信用の失墜する原因

生徒はいろいろ細かな事を質問するものである。其の時、行き詰つて、知らぬと答えねばならぬことは、教師にとりては此の上も無い苦痛で、生徒も又、知らぬといつても言ふやうな教師に對しては、次第に信用を失ふやうになつて来る。教師は些の油断も無く、常に研究をつづけてゐなければならぬのである。

根本の智識と理解

けれど、生徒のいかなる質問にも、滞りなく答え得る教師が、必ずしも學校教師として最もよい人といふことは出來ない。教師にとりて、より大事なことは、枝葉の智識では無くして、根本の智識理解にあらねばならぬ。活字引であるといふことは、教師として最上のもものでは無い。

字引先生

活きた人間

活字引であるといふ事は、却りて往々教師を生命のない、無味乾燥なものになしてしまふ。教師は辭書に化してしまつてはならぬ。教師は人間でなければならぬ。活きてゐる人間でなければならぬ、どんな細かなこ

とても知つてゐるといふ事は、往々にして、根本の大きな事を知つてゐないといふ事になる。活字引と化して、人間でありにくくなるのは、かうした成行きからである。

不
断
の
研
究

教師には、根本智識の理解と、絶えざる研究心があればよいので、字引を引けば解るやうなことは、生徒に自分でしらせさせるやうにしたがよい。よし教師が知つてゐる場合にしても、一々生徒の質問に答へることをしないで、生徒に自分で研究してみるといふ習慣をつけてやつた方がよい、字引を引いたり、本について調べてみれば分るやうなことは、教師も一々知つてゐなければならぬ必要は無く、又生徒にそれを一々覚えさせておくべきものでもない。生徒に與ふべきことは、やはり理解力と研究心とでなければならぬ。

生
徒
自
身
に
研
究
心
を
養
へ
よ

理
解
力
と
研
究
心
を
養
へ
よ

入學試験や、學校内に於ける試験の問題をみると、それは教師の方で

入
學
試
験
問
題

検閲をする便宜からでもあらうが、實際受験者の數が頗る多いので、字引を引いたり、本に就いたりすれば分ること、日常生活に殆んど用のないやうな小さなことが、問題として出されてゐることが多くある。地理や歴史の場合にそれが多いため、五年も十年も同じ事を繰り返して教へてゐる専門の教師ならばこそ覚えても居れ、普通の人では、よほど智識のある人でも、中々暗んじては居り得ないやうな、小さな事が、小學校の検定試験などにも出でゐる。あれでは生徒の本當の智識や理解力を認めることは出来ないのである。

教師は、生徒の質問に對して、知らぬと、きつぱり云ふことがあつてよいのである。それで教師の威信が墜ちるやうでは、教師としての根本の資格に於て、まだ足りないところがあると云はねばならぬ。『私には分らない』と答へて、それで威信が少しも損ぜられないと云ふのには、教

知
ら
ぬ
と
云
ふ
こ
と
は
切
ら
ぬ
と
思
は
れ
る
こ
と
を
教
師
は
認
め
ら
れ
な
い

教師の権威は何かから来るか

學識よりも大事なり
好む心は學問を

師は其の人格に於て、生徒に敬はれもし、愛されもしてゐるものがなければならぬ。此の際、教師の人格といふものは、必ずしも道德的人格でなくとも宜しい。そも／＼教師としての人格、言ひ換へると、生徒の尊敬と愛慕とを買ふやうな教師の人格は、温厚篤實であるとか、方正謹直であるとかいふやうな事から来るのではないのである。何と言つても第一に生徒を服させるものは、教師の學識である。生徒は、教師の、性格の中で、其の學識に最も大なる尊敬を拂ふものである。従つて教師の人格といふものは、専門知識の深奥なるところからあらはれて来る。學問が深いといふこと、學問を愛する心が大であるといふことは、教師に最も大なる權威を與ふるものである。

其れに、教授に對する、本當の熱心親切が加はつたときに、生徒は、全く教師に信服して来るもので、教師の人格上の少々の缺點位は、其の

教授に對する親切

蔭になつてしまひ、又多くの場合、生徒はそれを許容して、さういふ教師に非難を加へるといふやうな事は、殆んど無いやうになる。

全意識を自己の専門に集注せよ

教師を活かし、教師に力を與ふるものは、零碎な末梢的の智識で無くして、根本智識に關する深い理解である。教師の人格も、根本智識に對する強烈の研究心から生ずるものである。だから、教授をもつて、本來の職業とする教師は、心を多方面に分散させることをしないで、全意識を自己の専門とするところに向けて、直往することをしなければならぬ。其處から教師として必要な一切が湧いて来るのである。

此頃の學生は、種々の思想を抱き、色々の疑問をも有つて居る。彼等には、原據となるやうな書籍に就いて研究する丈の力がないから、彼等の眼にするものは、新刊の書籍で、多くは流行を逐ふて、新聞や雑誌の上で、もてはやされてゐるやうなものを讀んでゐる。彼等とその思想の

新刊書籍
及雑誌

犯すべからざる教師の信念の力

人間としての教師の生活

根本から教育してかかり、彼等を、其の全人格の上から指導して行かうとするのには、教師も、一渡りは、さういふ思想にも通曉してゐなければならぬことは、前に述べた通りであるが、併し、教師は、さういふ流弊の思想學問には、全くの門外漢であつても、無論、力強い感化影響を生徒に及ぼすことが出来るのである。教師の内部から、犯すことのできない信念の力が映發するときには、それが彼の周囲の一切の暗黒をも光に化してしまふ。それは彼れの實生活の経験から來ることもあらう。或は極めて權威ある學問思想の研究から來ることもあらう。さうした教師の信念の力は、何物にも勝りて生徒を動かすことのできるものである。それには、長い歲月の研究と経験とが待たねばならぬ。教壇に立つて、學科を教授するだけが、教師の生活の全部では無く、教師は又人間としての生活の他の方面を多く有してゐる。其處に教師は多くの味ふべく、

學問研究の好機會たるべき實生活

等閑にすべからざる日常生
活の経験

眞の智識と人格とを養はれど
かは何處
か

學ぶべき材料と機會とを與えられてゐるのである。苦しまなければならぬ事、根を盡して思慮しなければならぬ事、力限り骨折らねばならぬ事等が教師としての生活以外の方面に、屢々あらはれて來る。教師は其間から教師としての力をも養ひあげるといふ事を念頭におくべきである。さういふ苦勞の多い實生活を、つまらない厭はしい事として、不安と憂愁、又は等閑の中に過してしまふといふ事は、それこそ實の山に入りながら手を空うして歸ることである。不如意の家計に心を痛め、妻子の爲めに心を勞し、面倒なる親族關係、世の中との交渉、又は一身の不幸災厄のあることは、教師の仕事の上に大なる妨げとなるかのやうに、多くの人は考へてゐるやうであるが、さういふ人は、教師としての深い力ある人格なり、人生智識は、本當は何處から得來るべきものであるかを知らぬ人である。何れは、苦惱と困厄との多かるべき人間生活の中に突き出

されねばならぬ學生を教養するのに、それがための準備である學校教育に就ての根本の智識と力とは何によつて求めやうといふのであるか。

教師は、自己の専門とする學科に就ての研究を怠らなければかりではない、自己が遭遇する世間一切の出來事を、自己の智識なり、人格を磨き上げて行くための好資料とする覺悟がなくてはならぬ。此の實生活の苦痛の中から、滋味のある、寂びのある深い人格は形成され眞の人生智識は生み出されるからである。かうした實生活の中から、何物かを獲來つた老教師は、よしや、流行を逐ふて變轉して止まざる、當世の思潮などには暗くとも、むしろさういふものに超越したものを以て、若い者の上ののぞむことが出来るのである。けれど、若しも教師が、前に言つたやうな覺悟をもつことなしに、風に翻へされる木の葉のやうに、身世の痛苦に悩まされるだけであつたときは、それこそ、心づかひの爲めに、教師として

修養の好資料

滋味と寂びとのある人格

教師をして老朽者たるもの

師としての智識も、性格の力も枯渴して行き、深みが出来るところか、活氣も滋味もない、干乾びた、所謂老朽教員に墮してしまふ。

斷えざる研究心の流れが、教師の生命を進めて行くやうに、實生活の苦難の中にあつて、益々生命の力を感ずることの出来るのは、人間として、従つて又教師として唯一の向上の途である。其處にあつて、教師は、其の鮮やかな力強い個人人格をつくりあげることが出来るのである。他から傳へられたのでは無い。自分に固有の識見智識が、この苦難の中から啓發せられて來るのである。艱難の多い實生活は、教師を活かすか殺すかの二つである。眼の開いてゐないものは、艱難に會ふて殺されてしまふ。眼のあいてゐるもの丈が、艱難を比類なき學問に化して、それによつて益々眞實のものに向つて生きて行くことを爲し得るのである。何物にも勝りて。學ぶ價値のあるものは、人生其のものである。人生

實生活の苦みに生命の力を感得せよ

活かされるか殺されるか

人生は深
い

何を捨て
ても探ら
ぬばなら
ぬ寶

は多難なれば多難なる程、其價值は高くなつて行く。従つて、何物より得たる智識にも勝りて貴ときは、惱みの人生から獲て來た智識である。人生は平面上に横はつた、紙の様に薄いものではない、人生は深いものである。味つてみれば味はつて見る程、苦しんでみれば苦しんでみる程、其の限りなき深さが分るのである。人間生活の其の深みの中に、人が何物を捨てても、探らねばならぬ貴重の寶がある。人は、どうかすると、人間生活の表面にのみ眼をつけて、其の深いところのあるを知らず、其の表面の上を漂ふた丈で、すべてが終れるものと思つてゐることがある。其の底を探るべき機会に出會つても、徒らに失意と狼狽とに眼を閉ぢて、わが前に輝かされてゐる光を認めることが出来ない。

眞に學ぶ價値のあるものは、深い人間生活である。けれど、我等の經驗と心力とは極限があつて、我等が探り得る人生の深さには其の果て

達人の思
想を研究
せよ

自己の經
験に照ら
して研究
せよ

がある。されば、我等が自己の經驗のみで、把握し得る人生智識といふものは、その本當の深さにまでは到り得ないのである。ここに、我等に研究の必要が生じて來るのである。我等は、淺薄な噴々者流の思想を研究しやうといふのではない。其の經驗なり洞察が、人間生活の極處にまで到つてゐる達人の思想を研究しなければならぬのである。

大學の講義や、講習會で聞かされたり、教科書や、參考書の一渡りの研究によつて得られるやうな學問智識ではなく、長い年代によりて朽ちさせられることなく、時處を超越して光つてゐるやうな達人の思想を、我等が生涯の經驗に照して研究して行くといふ事は、人間として眞實に活き、教師として眞實の力を獲得する爲に、是非とも爲されねばならぬ仕事である。

それも、單にさういふ人々の思想を、書物の中に探るといふ丈では何

書を讀む
のは其中
に自己を
探すので
ある

にもならない。それによつて、わが生活を深くすることである。自分の手では掘り得ない我が生活の深さを、それらの助けによつて掘るのである。我が眼に見えない我れ自身の生活の極處を、それらによつて照らして貰ふのである。それらの人々の思想の中に、我れ自身を探ることである。

七 専門の學者と學校教師

十年の努
力

一事を眞に理解するといふことは、容易のことではない。藝が身になると云ふ迄には、十年以上の努力が要せられるのである。一事を眞に我が物とするには、生涯の苦心を重ねなければならぬ。教育者と成るといふことは、一藝一道を習ひ覺えるにも勝りて困難なる事である。これは生涯を通しての仕事でなければならぬ。然して、これは生涯を之に捧げるだけの價値の充分にあるものである。人間の眞の喜びは、努力苦心を重ねて何事をか成就して行くといふところにのみ存するのである。苦心慘憺の中に、一藝一道を習ひ覺えて行く人には、他人の知り得ない内心の喜びがある。教育者の喜びもまた其處になければならぬ。單に一學科の教授者となるといふことも、普通の人が考へてゐるやうに容易なこと

人間の眞
の喜び

一學科の
教授は平
凡の事だ
ない

では無く、又外見のやうに平凡な仕事では決して無い。其の極處妙境に到るといふのには、又十年以上、或は生涯の練習が必要なのである。さうして功を積んで行くところに、教師の内心の喜びといふものが發現して來るのである。

教師は、自分の仕事を輕んじてはならない。自分の仕事を、其の極處妙境にまで進めて行くといふ覺悟を以て、毎日の事に當つて行かなければならぬ。自分の仕事の中に満足を求めないで、種々の道樂に手を出して、心と精力とを分散させるやうでは、決して人生の眞の喜に參するとは出來ないのである。

自分の仕事の中に、喜をも樂をも、慰安をも見出すのでなければならぬ。自分の仕事は、人間としての務めであると共に、又自分の道樂であり事業であると共に、又遊びであるやうでなければならぬ。それには一

自分の仕事の中に
満足を求めよ

義務であつて道樂

教師と専門家

事に心を専らにするのでなければならぬ。

學校教師は、たゞの専門家とは少しくちがつたところがある。普通の専門家又は學者などの場合には、其の専門とする藝道、又は學問に精熟通曉するといふだけで事足りるのであるが、學校教師は、それを生徒に授けて、それによつて、生徒の全體の教育の上に資するといふことをしなければならぬ。されば、教師は、自分の授ける専門の學科が、生徒の全體の教養の上に、どういふ位置を占め、どういふ作用を及ぼして行くものであるかと云ふことを辨へてゐなければならぬ。小學校の場合には一人の教師が、兒童の教養全體を引き受けて行くのだから、其の心配はないのだが、中等學校になると、自分の専門とするところに没頭する餘り、教師は、生徒の全體の教養といふことには、没交渉になつて行く憂ひがある。甚だしきは、何故に自分は斯く斯くの教科を生徒に授けるので

生徒の教養の全體に着眼せよ

あるか、つまり、教育上に於ける自己の受持教科の意義をも價值をも辨へないでただ教へることになつてゐるから教へてゐるのだと、漠然とした意識の下に教授してゐる。自分の専門とする學術に對して、興味を深く感ずるところから、之を生徒に傳へることに、衷心の興味があつてするのなら、大に宜しいのであるが、それさへに覺束なくして、たゞさまつた事をさまつた通りにやつてゐるだけの教師も少くは無いのである。教師が教授者として、本當の仕事をなし、又深い喜びをも獲やうとするのには、單に學術に對する興味と、教授に對する興味を、有するばかりで無く、生徒の全體の教養の上にも目をつけて、自分の仕事の教育的意義を考へ、それを實現して行くやうに心がけなければならぬ。更に又、教師は、自己の専門とする學問智識は、宇宙全體の體系の上にどういふ位置を占めて居り、全宇宙とどういふ關係の上に立つて居り、又人文發

専門の智
識と宇宙
人生に關
する全智
識との關
係を知れ

教授の眞
意義

達の上には、どういふ作用をしてゐるものであるか。自分が取扱つてゐる部分は、全體とはどういふ關係をもつてゐるのであるか、といふことを明かにしなければならぬ。さうでない、其の學問は生きて來ない。のみならず、生徒のために活きた教授をすることが出來ない。學校に於ける教授は、單に智識を生徒に與えらるゝといふだけでなく、それによつて生徒の思想全體を養育し、其の性格を發達させるのにあるから、全體と隔離した智識を、生徒の思想全體と交渉なしに授けたのでは、生徒の内部にあつて活きたものとはなることが出來ない。生徒は、遊離した個々の智識を別々に與えられるのではならない。生徒は單に雑多の事物を知らされるだけに止まつてはならない。體系ある全一のものが、生徒の内部に組織されるのでなければ、智識は、生徒にとりて活きたものとはならず、生命を有するものとはならず、従つて性格の上に其の作用をすることは

系統ある
全一思想
を與へる
のである

教育的教授

出来ないものである。

教師が、たゞ自分の専門とする智識にのみ通曉してゐるのでは、本當の教育的の教授は出来ないのである。自己の専門とする智識が、人間の思想智識の全系統と、どういふ關係にあるものであるかを知るには、専門以外のことに、其の關係を明かにし得る範圍に於て、通曉する所がなければならぬ。これは、専門の學者にも、元より必要のことであらうが、教育者には、特に必要のこととて、出來得るならば、教師は、自分の授ける教科以外に於て、生徒は平生どういふ智識を收得し、どういふ思想を形成しつゝあるかを知ることが肝要である。

戰場にある將軍と教師

戰場にある將軍が、全戦線の配置動靜を、明瞭に知悉し得て、全軍を指揮するが如く、教師が若し、生徒の思想の全系統を明かにして、生徒に對することが出來たならば、其の教授は最も有効に、生徒の内部に作

用し、はじめて活きた教授を施すことが出来るであらう。

我邦の中等學校では、一人の教師は、一教科若くは關係の密接な二教科を擔當するに止まつてゐるが、之れは、擔任の教科を深く研究して行く上からは、都合のよい事であるが、生徒教養の上からいふと、如何なものであらうか。一人の教師にして、關係のある三科以上の教科を擔任することにした方が、教育的價值は深くなるのではなからうか。中學校などでは、英語教師の一人が、文法だけを擔任して、一年から五年迄の文法だけを教授してゐるといふやうな例もないではない。これは極端の例であるけれど、國語の教師が、外國語には全く盲目であつたり、英語の教師が、日本の文章を書くことが下手であつたりするやうな事では、普通教育を施す學校の教授としては、決して其の當を得たものと云ふことは出來ない。

一人で一學科を擔當するの得失

専門學者としての教師の價値

學校教師論

九〇

けれど、中等教師の中に、専門の學者、自分の専門とする學術に、全く没頭してゐる人があるといふ事も、決して教育上に不都合がないばかりでなく、又別方面の好影響を生徒の上に及ぼすものである。自己の専門學科に對する熱心と努力、其の專念と忍耐とは、生徒に甚深な精神的感化を與ふるものである。かういふ教師であると、世間の事に暗く、日常平凡の事に氣が附かぬことなどあつて、往々物笑ひの喜劇を演ずるやうな事があつても、其の特種の人格は、さういう中から光を放つて、必ず生徒の心を輝かすものである。日本の學界に貢献することのある程な教師が、中等學校や、小學校にもあるといふことは、其れ等の學校にとりての光榮でもあり。又格別の幸福である。さういふ教師が、一身の榮達といふやうな事に顧慮しないで、低い地位に安んじて、孜々屹々として研學に餘念がなかつたならば、其の教育的精神的の功果は、一層大なるものがあるであらう。よし、かかる教師が、一つの學校に長く止まることなく、研究を進めて行つた結果、高等學校や専門の學校の教師となつて累進して行く事があつても、其の人の性行の影響は、長く其の學校に跡を留めて、其の學校の教育の上いつまでも善良の刺激を残すことであらう。若し、中等學校などに、かういふ篤學の教師があつた場合には、學校は充分に其の人に保護を與えて、其の研究に便宜を與えてやることをしなければならぬ。

學界に貢獻する學校教師

學校は篤學の教師に保護を與へねばならぬ

尊敬すべき學者の性格

自己の研究に專心のあまり、世間の一切事を忘れ、自身に利害關係のあるやうな事にも心を配らず、只管に研究を追ふて進んで行く人は、學者としても學校の教師としても、極めて尊敬すべき人で、かういふ人と思ふと、我等は崇高の感をさへ抱かされるのである。かういふ人は、人目に立つやうな處に身を置かなくとも、其の人格の力は、冥々の裡にあ

沼波瓊音
氏の徒然
草講話

つて、多くの人をも動かすやうになるものである。私は、ここに、さういふ學者の一例として、沼波瓊音氏の、徒然草講話の中の一記事を拜借することにしやう。

故醫學博士田口和美氏は、解剖學の大家であつて、歐洲未發の創見を澤山爲た人だ。この人は日清戦争を、殆ど其終局になる頃まで知らないて居た。博士は新聞と云ふものを讀まない。唯起きて居る間は、大學の研究室に、或は自宅書齋にあつて、解剖一點張であつたのだ。便所へ行く時間を惜んで、研究室内のコップにして居たのは博士であつた。疲勞の爲解剖の屍體の肉の中へ頭を突込んで寝て了ふのは博士であつた。

田口博士が日清戦争を知らなかつた事は有名な話だが、博士自らは

子供の様
な眞摯な
單純の心
の博士

そんな事が噂されてると云事も勿論知らなかつたし、其次の大戦日露戦争も、開戦後數月に至るまで知らなかつた。其の頃私の知つた畫師が、博士の爲に解剖圖を描いてたので、よく博士の家を訪れることがあつた。もつとも用の外は口をきかぬと云工合であつたが、或夜其畫師が、日露戦争の話を出した。博士は喫驚した。畫師はこの戦争の始まつた原因から、子供に話すやうに話した。博士は興味をもつて聞いた。「ウムそのアレクセエフと云奴は怪しからん奴だな」など、亢奮もした。畫師が辭し去る時に、女中が叫いた、「一體どんな御話があつたので御座います。旦那様が今晚ほど長くお客様と御話になつたことは、始めて御座います」と云つたさうだ。「日露戦争はおれの専門外の事件だそんな事は話すな」と博士が叱りつけても、よいのであるが、この面白がつて聞いた所が、面白いでは無いか。この畫師の爲に博士は、日

ここが博
士の面白
い處

更に博士
の面白い
處

露戦争があると云事を、戦争最中に知つたのだ。凡人ならば、それからはチヨイ／＼新聞を見て、其の戦争の發展を知りたがるところだが、もとより博士は其一夜の話だけで、相變らず、新聞も見ず、再び戦争談も聞かずに暮した。徒然草講話第七十八段二五一—二五二

丑先生

福島縣の地方の或る小學校に、丑といふ先生がある、福島師範學校を卒業してから、今日迄二十六七年の間、初めから同じ學校に勤務して今日に至つてゐるのである。然るにまだ校長にも、首席にもならず居る。自分よりは後に學校を出た人が、つぎ／＼に首席や校長として、其の學校に職を奉じて來るのであるが、其の先生はさういふ人々の下に居ていつも平氣にやつてゐる。何にも心にかかる様子は無い。職員會などの場合には、それでも諛々諤々として自己の意見を述べ、随分顔を赤く

して校長にも喰つてかかり、少しも憚るところも、恐るるところもない。一般の教師が、とやかく言ひ難してゐるやうな教授法などにも、全く無頓着で『ナニ、兒童に分るやうに教へてやればよいのだ』と云つて居る。若い教師達の世話をしたり、指導をしたりすることに熱心で、自分が植物採集に特に興味をもつてゐるところから、若い教員、殊に引き込み勝である女教員などを鼓舞して、山に採集などに引率して行く。植物が好きで、夏の休みには、信州邊の山までも、胴籠をさげて出かけて行く。家には錯葉した植物が澤山に保存してあるので、出がけには、知人の家々を廻り、若し出火でもあつた際には、外のものはどうでも宜く、押し葉だけ、どろどろ取り出して下さるやうにと頼んで行く。手工にも堪能で、講師に聘せられて、夏期講習などに出ることもある。兎に角一風變つた人と思はれるが、かうした教師は、昇進をのみ望んで、心の安まることの無い人

世間に知られない
眞實の教育者

よりは、地方教育のためにも、児童のためにも、どの位役に立つてゐるか分らない。世間は目をつけて呉れない。表彰されるやうな事もないが、それだけに、かういふ人の胸中には、他人の瞥見し得ない別天地があるに違ひない、さういふ別天地に住んでゐればこそ、身の外のことについては、平氣で無頓着で居られるので、かういふ人の生活には、實に貴いものがあると云はなければならぬ。

中原源治
氏

これも同じく福島縣師範學校の、講習科を出た人で、中原源治といふ人は、やはり植物採集に熱心で、暇ある毎に、附近の山中を跋涉してゐたが、或る時、珍らしい一個の植物を發見した。それが何と云ふ名のあつた植物であるかが分らなかつたので、東京帝國大學に送つて、調査を頼んだ。ところが、それはまだ世界の何人によりても發見されたことの無

い種類のものであつた。それで、採集者の名をとつて、それに、ゲンヂウツボと命名された。其後、中原氏は、帝國大學から依頼されて、臺灣に植物採集に行つて居たこともあり。亞米利加に行つて研究してゐるといふ事も聞いたが、其の後の消息は知らないと、これは、同地の人から聞いた話である。

八 個性論

小學教師
の學問研
究

小學校教師でゐたのでは、學術を専門的に研究することは出来ないと言はれない。成程、小學校の教師は、多くの書籍を涉獵するやうな時間をもつてゐない。殊に語學の力が無い。此の二つは、學問をするといふ上には、大きな障礙となる。けれど、纏つた、範圍の廣い研究をしやうと云ふことは、困難であらうけれど、或る一局部の研究ならば、出来ないといふことは決してあるものでない。研究の價値は、それが廣范であるといふ所には無い。一局部でよいのである。自分の生活なり。平生の經驗に近い範圍内のところで、他の何人もが、未だ着手したことのないやうな、研究の材料なり問題は、いくらもあると思ふ。それには、必ずしも語學の必要はない。多くの書籍を涉獵しなくともよい。活きた實際の事實なり資

前人未開
の地は多
い

料について、自分の頭腦相應の研究をして行けば、どんな山間僻地にゐてもむしろ山間僻地にゐた方が 先人未發の發見をも、爲すことが出来るであらう。自分が立つてゐる處、自分の爲してゐる仕事、これは自分にのみ特有のもので、自分の經驗は、世界の何人もが、嘗て經驗しなかつたこと、又經驗してゐないこと、未來に於ても、誰も知ることのない、自分にのみ許された、特得の經驗である。其の經驗するところは、狭小でもよい。自分にのみ許された經驗は、何物にも換ふることの出来ない自分にとりての貴とい實である。この自分にのみ許されてゐる自分の經驗を尊重して、それを奥深く推し極めて行つたならば、其處には何人もが到り得ない。先人未到の一境、自分が切り開くでなければ、永久何人によりても開かるゝ事なかるべき、極勝の境が必ずあるべき筈である。何にも博士や大家を恐れるには及ばないことである。自己を卑下するに

語學も要
らぬ多讀
も要らぬ

は及ばないことである。左顧右視して躊躇するにはあたらないことである。まづしぐらに自己の生活を研究の極勝處にまで突き進めて行くべきである。

東奥の一
等正教員
の優秀な
る研究

たしか木山氏時代の内外教育評論に掲載せられたのであつたと思ふが、澤柳博士が、東奥の或る小學教師！尋常科正教員の免状だけの人であつた—の手になつた。修身教授に關する論文に、推讚の辭を添えて、公表せられたことがあつた。博士の推讚の辭には、當今如何なる博士學者でも、これ以上の識見をもつことは出來ないと云ふ意味のことが云つてあつた。私もこの論文を読んで、博士の言を最もであると思つた。博士は猶ほそれに附け加へて、此の筆者は東奥の僻地にありて、尋常正教員免許狀を受領しただけの人であるが、之によつて見ても、學術研究には、必ずしも語學や多讀の必要のないことが明かだと云つて居られた。

小學教師
と専門的
研究

こゝに心しなければならぬ事は、小學校教師が、ある特種の方面の研究をするといふことに就てである。或る若い教師が、私に問ふて曰ふには、教師には、何か一つの特長のあるといふことが、種々の方面に便利でもあり、興味もあることであるが、さて小生は、何を特長にすべく、これからやつて行つたらよいか。先生の御教示を受けたいのですとの事であつた。私はそれに答へて、次のやうに云つてやつた。

或る一事
に特に出
ふれると
秀

成程、特長のあるといふこと、或る一事に、人以上に秀れたところのあるといふことは、自分にとりても興味のある事で、又他人のためにも都合のよいことであるが、併しそれは強て求むべきものではない。或る特得の一藝一能を有して居るといふことは、小學教師として最も價値のあるといふべきものではない。小學教師は、むしろさういふ一方面的のこ

兒童の全體が小學教師の本分

とに目をつけないうで、兒童を立派に教養して行くといふ全體に亘つて努力をしなければならぬ。生れつきか、又は修學の間に、自然に或る一藝一能の秀れて發達したやうな人は、特にそれを展ばして行くのも宜しいが、別にこれと云つて、目立つた長所のないものが、わざ／＼長所を得やうと工夫することは、却つてよくないことである。又長所などといふものは、作爲的に得られるものでなく、それは自然に發達すべきもので、自分の仕事に精を出して、やりつづけてゐる間に、自然にあらはれて來るものである。はじめから、何々を自分の長所にしやうと目論見を立て進むのはいけない。君はただ自分の仕事を手落なく力一杯やつて行けばよいので、其の外の事に心を配るのは宜しくない。さうして行つてゐるうちに、君に長所があるのなら、それは自然にあらはれて來る。無いものを無理に出さうとしても、それは出來ないばかりで無い。却つて君

長所はどうかして出來るか

個性はどうかして出るべきものか

の仕事の根底に傷をつける事になる。

若い教師は、私の言をきいて、さうですか、分りました、やつぱり何事でもたづねてみないといけませんね、と云つて歸つた。

私は、或る中等學校で、校長が、職員生徒の全體に、訓話をしてゐるのを聞いたことがあつた。校長は、旺んな意氣で、莊重な語調で、特色を發揮せよといふ題の下に、訓話をしてゐた。我々は、何か一つの特色を發揮しやう、我々の特色は何であるべきかといふ事を明かにして、其れを發揮すべく努力奮闘をしなければならぬと云ふのであつた。生徒などが、演說會で、氣焰を吐くには宜しからうが、小學教員を養成する學校の校長の訓話としては、甚だ權威のないものであると思つて、私は聽いて居た。

特色であるとか、個性であるとか、さういふ事を念頭から去つて、虚

心になつてかゝるで無ければ、本當の仕事は出来るものでは無いのである。さういふ事を、頭から標榜してかゝる人の仕事は、きつと、不自然な無理のある、どうかすると誇衒的なものになつてしまふ。併し、特色又個性といふことが悪いのでは無い。我等の仕事には、我等の特長があらはれ、我等の個性の色が出て来るやうでなければならぬ、仕事の價値といふものは、其の大小にはよらないので、其の人の個性のあらはれてゐる程度によつて、秤量せらるべきものである。これは獨り藝術上の創作ばかりではない。教育も、教授も、當事者の個性が、其の上に鮮明に活躍して出るやうでなければならぬ。他の何人の追隨をも許さぬやうな、教育の方法、教授の仕振りを實現しなければならぬ。けれど、それは始めから、それを目當に意識して取りかゝつて出来るものではない。個性特色の發露は、努力に伴ふ自然の結果でなければならぬ。寧ろ虚心にして、

仕事の價値は個性のあらはれによる程度

努力に伴ふ自然の結果

没境に個性の躍然と活然と

自己の仕事に没入し、習熟の結果は、仕事と自己とが一枚になり、我が仕事か、仕事が我がかといふ、熟練の妙境に達した時に、個性特長が躍然として光と色彩とを放つて現はれて来るものである。はじめから之を現はさうとして、意識的に外に示すやうな個性特色は、無理と作爲と、虚偽とによつて出来たもので、さういふ個性特色は、仕事の本當の生命を破壊してしまふ。

遂には、自己に特有な、色彩なり調子が、發現するに至るまで、自己の仕事に全く我を没入する。其の境地まで自分の仕事をやり了せるといふのでなければならぬ。學科の教授なり、學校教育の仕事を、本當のものとしやうと努力して行くときには、どうしても其の仕事は、其の土地に特有な、又其の學校、其の教師に特有な性質を帯びて來ないでは居られないのである。さうした結果が、更に進んでは、其の學校、其の人に特有

特長は作爲によつて出來ず

な研究ともなつて現はれるのである。ある特別の研究を發表して名を擧げた人や、異彩を放つてゐる學校のことなどを見聞して、羨望の念に刺激せられて、早く何等かの特長をとらへやうなどと急ぐ人は、到底本物になることは出來ない。心しなければならぬと云ふのはこの事である。

仕事は人なり

個性特色といふ事に就て、今少し述べたいことがある。「文は人なり」といふ言葉があるが、私は更にそれを大きくして、「仕事は人なり」と云へたいのである。藝術上の創作は云はずもあれ、どんな仕事でも、其のコツが分り、其の堂奥にはいることが出來ると、其の仕事の上には、必ず其の人の個性が出て來る。そこに、仕事の價值と味とがあるのである。私は、屢々地方に講演をたのまれて、人力車に乗つて駆けさせたことが度々あるが、此の車を引いて驅けるといふことの上にも、引手の個性が

仕事の價値と味ひ

人力車夫の個性

あらはれるものだといふことを知つた。たゞ疾い遅いばかりでは無い。乗心地の上に引手によつての差異が感じられるのである。

文章と個性

文藝の士の作品には、勿論其の人の個性が見られることであるが、文章といふやうなものは、文藝専門の士ばかりで無く、どんな素人のかいたものにも、其の人の個性は出なければならぬ筈である。文章のよしあしは、文格が整ふて居るとか、言葉使ひや、修辭が巧みなといふやうなところで判断してはならぬ。書いた人の個性が、どの位まで出てゐるかといふことに目をつけなければならぬ。ところが、今日の小學校などでも、又師範學校などでも、作文を教へるのに、成るべくこの個性を壓しつゝすやうにして教へてゐる。子供は子供の個性のあらはれたやうな文をかしなければならぬのに、大人のかくやうなものを、子供が書かされてゐる。綴り方の教授を參觀してみると、教師は子供に自由にかゝせる

個性を壓する作文を教へる

誤られた
名文章

時間を與へないで、時間の大部分を、はじめには何を書くべきか、真中にどういふことをかゝねばならぬか、結びはどうしたがよいかといふやうな詮索に費してしまふ。そして布置が形式にはまつてゐて、文法上や語法上の間違が無く、そして立派なことを言つてさへゐれば、立派な文章として評價されてゐる。兒童の内部生命が、文章の上にはあらはれてゐるかどうかといふ事は顧みられない。或る時、教育ある一人の婦人を訪問した事があつた。其の時一通の郵便書狀が着いた。婦人はそれを披いて讀み了つて、私の前にそれを投げ出して、今の教育はこれだから困りますよと云はれる。それは女子師範學校を卒業した。女教師から來た手紙であつた。私は取りあげてみると、筆蹟も可なり立派である。そして一筆しめし參らせ候から、かしくまで、一字の間違も、一句の非難すべきところもない。朱を入れて直さねばならぬ處といつては一個所も無いの

女子師範
卒業生の
手紙

である。それは作文五百題といふ種類の本の中に挿んで、少しも耻かしく無い文章である。婦人は何處が氣に入らなかつたのであらう。

差出人の如何なる人であるかを知らない私には、此の手紙を讀んで、其の人が此の手紙をかいた時の、その境遇、その生活について、何等の印象をもうけることができなかった。其の人は、此の手紙の中にはちつとも生きてゐないのである。この手紙のまゝを寫しとつて、それに自分の名を署して、何處でもよい、久濶を謝して挨拶をしなければならぬところに出したら、それで立派に間に合ふのである。誠に重寶な手紙であつた。

婦人の氣に入らないのは此處であつた。私も婦人に同感であつた。私の知れる一人の先輩は、徹底した生活をしてゐる尊敬すべき人であるが、文章は拙いと、自分にも思ひ、人にもさう思はれてゐる人である。此の

誠に重寶
な手紙

拙い名文
を書く人

人が、洋行をしたことがあつて、度々詳しい消息を知人に寄せてゐた、ここに又、私の知友の一人で、藝術を鑑賞したり、人の氣質を觀破するに、異常な直覺力を有する人がある。この友人が、或る時洋行中の私の先輩の通信を手にして、始めの一節だけよんで、この人の性格はこんなではないかと私に問ふた。この友人は洋行中の私の先輩に就ては、何事をも全く知らないのである。ところが、易者であるかのやうに、この人の言は的中してゐたのであつた。どうして分るのだときくと、文章の上に出てゐるんだと答へる。私はこの人の洞察力にも驚いたが、彼の先輩の文章は、拙い名文であるのだと感じたことであつた。

思ふ儘に
不用意に
書けそし
たら名文
が出来
る

無論、個性のあらはれるやうな文を書かうと意識したのでは、其文章に本當の個性は出るものでなく、それは作爲的な虚偽のものになつてしまふ何事をも意識しないで、思ふ儘に、全く不用意に、ありつたけの自

己を披瀝して、筆を下した時に、個性が自からに出るのである。そして本當の名文が出来るのである。

成蹊小學
校の兒童
の文章

池袋成蹊小學校兒童のかいた文章を、私は度々讀んでゐるが、そのすべてが、私の希つてゐるやうな文章ばかりである。私は其の一例をこゝに引いてみやうと思ふ。

電信はしら

學校の前に、電信柱がたくさん立つてゐます。太いのもあれば、細いのもあります。又線がくものすの様にたくさん、ついてゐるのもあれば、少ししかついてゐないのもあります。あの線があれば、どこにでも電氣がつたはるのだから、面白うございます。電氣はどうしてつたはるのでせう。電信はしらは、ふしぎなものです。そばに行つて、しづかにきいてみると、いつもゴウ／＼とうなつてゐます。あの音は

なんぞせう、電信ばしらには、鳥がとまつてゐることがあります。又工夫がのぼつてゐることもあります、ちかごろでは、よく、風のやぶれたのがひつかいてゐます。

眼の着け方が、いかにも子供らしくて、それを其儘にかきあらはしてある、大人と違つて、子供は物をどんな工合に観てゐるか、よく分るのである。

私は、兒童の書いた文章を見たゞけで、其の教育の全體をも察することが出来ると思ふのである。私の云ふ意味での、よい文を書き得る兒童は、よく教育されたものであると云ふことが出来ると思ふ。文章をもつて、其人を知ることが出来るものならば、又其れから推しても、其の教育を知ることが出来る筈である。この「電信柱」のやうな文章をみて、其の人の教育を知ることが出来るばかりでは無い。前に言つた、女子師範

兒童の書いた文章をみて教育の全體を知る

自分自身をあらはせ

邪路に陥つた文章

今の若いものは筆跡者

學校の卒業生のかいたやうな文章をみても、その教育がどんなものであつたかを知るに難くはない。

或る晩、師範學校の生徒が數名、私の宅に遊びに來た時、彼等の一人が、どんな文章を書いたらよいのですと問ふた。自分が其儘にあらはれるやうに書いたら、それが名文だと私は答へた。私がさう答へたわけは、一つは彼等が文章の邪路に陥りつゝあるのを見たからであつた。彼等の間には、毎年三回、彼等の手になつた文章を集めて、印刷して配布するといふことが行はれて居る。それは作文を奨励する目的で爲されてゐるのであるが、それに掲げられる文章は、大概、彼等の中での、作文に堪能なるものゝ手になつたもののみである。それをみると、今の時代の若いものが、文を書くに巧妙になつたことに驚かされるのである。其の達筆で、其の調子のよいことなど、我々教員は、後ろに瞠目たらしめられ

巧妙なやうな文章

ると云はなければならぬ。けれど、私はそれについて、彼等を警醒してやつた。あんなものをよい文章だなどと思つてゐると大間違だぞと。成程、校友會雑誌の中に出てゐる君等の文章は、文章世界と云つたやうなものの中にある、大家や、文士達のかいたものと、一寸見別けのつかぬ位巧みにかいてある。恰も、當今有名な文士達の文章を讀んでゐるやうな心持をさせられる。だが、そこが、君等の文章の劣悪なところである君等の書く文章は、君等自身の生活から、自然に出て來たものではない、君等は、常に文藝の雑誌を耽讀してゐるところから、知らぬ間に、其れ等の思想や調子が、君等に憑り移つて、君等をしてあゝいふ文を書かしてゐるのである。つまり君等は文士の眞似をしてゐるのである、朝夕、穩やかな自然を周圍に眺めて、學科の勉強に逐はれたり、又それを追求してゐる君等には、君等自身の生活が無ければならぬ。君等の思想、君

人の眞似をしてかいた文章

自身の生活
を他人の生活
をすな

等の情調が無ければならぬ。然るに、君等の文章をよんでみると、そこに、東京に住んでゐる文士達の面影を思ふことはできるが、少しも君等の生活を窺ふことは出来ない。加之、文章のことはさて置いて、君等は、自身の生活をしないで、自分がかぶれてゐる文士等の生活を生活してゐるのではないのか。君等には東京人などの經驗することの出来ない、君等に特有な思想情調がある筈なのを、その眞實のものを葬つてしまつて夢の様な、影のやうな、雑誌などの中にある他人の思想感情をとつて、わがものゝやうにしてゐる。文章が虚偽になつてゐるばかりで無い。君等の生活が虚偽になつてゐるのだ。私は、君等自身の文章を見せて貰ひたいのだ。なつてゐなくとも、君等自身の生活をあらはした文章であつたら、それが名文である。だから、本當の文章の書ける人は、本當の間だと言ふことが出来る。自分といふものを取り失つてはいけないぞと、

本當の文章を書く人は本當の間だ

私は捲くし立てたが、彼等は、分つたやうな、分らぬやうな顔して、さうですかあと云つてゐた。

能文といふことは、本當の文章をかき違ふこととは、學校教師は、達筆家である必要も、能文家である必要も無いが、かういふ文章を書き得るやうには、工夫を用ひねばならぬと思ふ。それが、單に、文章の上にはばかりとどまらないうで、その事が、人格全體の上に及んで行くからである。私の如きも、この事に氣附いてから、十年以來其の事に思ひを凝らして來たが、幼ない時から、私の心の岩に、貝殻のくついていたやうに固着してゐる虚偽の塊まりは、中々にとれてしまはな

虚偽だらけの生活

能文といふことは、本當の文章をかき違ふこととは

るのである。筆をとる上にも、生活をして行く上にも、この虚偽が私の本當の姿をかくして行く、虚偽でないつもりで書いたものを、後で讀んでみると、虚偽であつたことに氣附く。自分に内容を持ち合せてゐない

自分を引他思想に込めたり筆にしたりする

言葉を、因襲の儘に思はず使用する。自分の内生活が見えなくなつて、自分はいつの間にか、他人の思想の中に、頭だけを突き込んで、其處からいろ／＼のことを口にしたり、筆にしたりする、それで考へてゐる事と、生活其ものが別々になる、足の爪先まで、他人の思想に投げ込んで、そこに自分を殺すか、突き込んでゐる頭を、其の中からひき出して、明るい光の下に、自分自身を活かすか、孰れかを爲ることが出来ればよいのであるが、煙草が禁められないと同じやうに、其の事が却々容易で無い。知らぬ間に、巻煙草に火をつけてゐるやうに、煙を吹かさなければ、自己の存在に満足が感じられないやうに、美しい高尚な他人の思想の中に、頭だけを突き込んだり、さういふものを煙草の煙のやうに口から吸ひ込んで、鼻から出すのでなければ、存在に満足が感じられない。二三年前から、私は煙草よりも好きな、思想に關した書籍の翻讀を

自分の生活を進めよ

止めることにした、それは、自分の思想に生きやうといふ努力であつた。それは、煙草を斷つたよりも、私には甚だしい淋しさであつた。其の淋しい中に、私は自分の内生活を進めて行くことにつとめた。私の内生活の流れが、停滯したやうに感じられたとき、それを切り開くために、私は他人の思想に接觸することにして來た。さうした行き方は、私を博識にはしない。併し、私は淺薄な物識りとなる爲めに、自己を失ふを怖れて、この試みをつゞけて來たのである。私は之れを私の生活全體の上に推し進めて行きたいのである。私は自我に死ななければならぬところまで、私自身の生活を突き進めて行きたいのである。

九 人格教育と學校の教育

我が生活の創造

私共は、自分自身を生活しなければならぬばかりでなく、自分自身の生活を築いて行かなければならぬ。創造して行かなければならぬのである。前に言つた文藝にかぶれてゐる若い人々の場合や、他人の思想にのみ没頭することをしてゐる時には、丁度唇氣樓をぞも築くやうに、自分の現實を忘れて、書物の中の思想をあれやこれやと繼ぎ合せたり、色彩つたりして、それで立派なものが出来たやうに夢想をする。其處にどうしてアリチュアルな生活が創造せられやう。我等の生活の創造に要せられる材料は、我等の環境である。我等の周圍には、我が在處の自然がある。在處に特有な山脈があり、野があり、森がある。そこにはそこにのみ特別な人間生活がある。我等は日に／＼絶えず其れ等と交渉をさせら

我れに特有な環境

れてゐる。我れには、我が妻があり、我が子等がある。我は其等の面倒を見て行つてやらねばならぬ。そして我には我れの仕事がある。毎日毎夜、我れは其の事に身をも心をも傾注しなければならぬ。これが我が生活である。我等は、これに我等の手を觸れ、我等の眼を注がなければならぬ。そこに我等は或る情緒を感じ、そこに我等の思索を加へ、其れ等の運用に我等の意志を働かさねばならぬ。然して、此處に、我等に特有な我等の生活が、其の深いところ、其の明るいところにまで、創啓せられて行かなければならぬ。我等は、時に、他者の思想に助と力とを籍りて、我等が創啓の途を進んで行かなければならぬのである。

我が環境には、我が眼を向けることをせず、我が意志を働きかけることをせず。空しい他人の思想感情の中にのみ游泳して、其處に唇氣樓のやうな夢幻的生活を營んで行くものは、脚下の我が生活が次第に稀薄に

唇氣樓の
やうな夢
幻生活

自分の
ものを
観る
もの
を
観
る

なつて、遂には幽霊のやうに地を離れて、空に掻き消えて行かねばならなくなる。若い學生達の中にも、さういふ人々が多くあることを私は視てゐる。先きに云つた、師範の生徒等を、警醒しやうとしたのは、一つはこれに向つてであつた。君等の頭の中には、君等を圍繞してゐる自然も、君等が朝夕従事してゐる仕事もはいつてゐないのだ。君等はうはの空で、物象に接し、うはの空で仕事をしてゐる。だから筆を執つて、自己を書き現はさうとする時に、君等の筆端からは、君等の實際の生活はあらはれて來ないで、君等の眼が始終引附けられてゐる、文藝雜誌の中の、文士達の生活が流れて來るのである。眼前の事象を書きあらはすにしても、それは、田舎の若い學生の氣分の中に漂白されたものでなくして、遠い大都の文藝家の情調の中で染色されたものになつてゐる。君等はずもつと君等の現實に眼をつけて、それで君等の生活を形づくるやうに

自己の生活
を築け

學校教師論

一一二

しなければ、君等の生活は、力強い活きたものとなることは出来ない。君等自身のことばかりではない。君等の考へ方感じ方物の觀方が、本當の途に返るでなければ、君等によりて爲される小學兒童の教育が、眞實から離れて行つてしまふではないか。かう云つて、私は先きの、「電信柱」の文などを讀んでさかせて、彼等の心を啓いてやらうと試みたのであつた。

眞實な生活を送りたい

小さい弱い人間であると、自己を認めてゐた私は、校長になつて腕を揮はうの、ペスタロヂのやうな精神家にならうのといふ望みはもたなかつた。偉大な人物にならうとか、力強い生活をしやうとかは、猶更に思はなかつた。たゞ眞實な生活を送りたいと希つてゐた。そして教師らしい本當の教師になりたいと欲した。其のためには、人間生活についての、

眞實の智識

眞實の智識を得なければならぬと思つて、種々の人の教訓に心を潜めて、弱小な私の力で爲し得る丈のことは爲して來た。私には、世に有り來つた道徳律を守れば、それだけで眞實の生活であるのだとは、どうしても思へなかつた。又傳來の宗教の何れかに、自分を當て箴めてしまふといふことも到底出來なかつた。私の生活の中心となつて、私の生活の全部を支配するやうな人生智識が、私には極めて必要であつた。子供のやうになつて、道を求めて行つた私は、人の教へを誤つて受け入れたり、眞直の路を行き得ないで、迂餘曲折した行き方をしたこともないではなかつた。

勞役の尊重

勞役の尊といふことを、中途で教へられてからは、どんなことをでも、私の力の及ぶ限りは爲して來た。氣儘に育つた私は、小さい時から、勞働をしなかつたばかりで無く、自分の事を自分ですることをさへしなかつた。

人格教育と學校の教育

一一三

つた。家が貧うして、母は毎日田畝に出で、根限り働いてゐるのに、私は家に引籠つて、物をかひたり、本を開けてみることはかりして、一度だつて満足に母の手助けをすることは無かつた。中學に行くやうになつてからでさへ、自分の踏み切つた下駄の鼻緒を、母に立てさせて平氣でゐた。

此の論の最初にもいつたやうに、少年園といふ雑誌をみるやうになつてから、其の雑誌の中に、少年學生のために勧めてあることは何でも實行しつづけた。けれど勞役の大事なことについて説いてあるのには、一度も出會しなかつた。學校でも、嘗て一度もさういふことを聞かされたことはなかつた。私が勞役の尊重すべきことを知つたのは、東京に學生となつて、トルストイなどのものを讀むやうになつてからであつた。薩南に居た頃は、生徒にも其の事について教へ、自分も人が目を側てた位

トルストイの教

自炊生活

家庭生活に必要な勞役は、どんな事をでも、自分の手を下してやつた。病氣の途中、孤棲をしなければならなくなつて、自炊をはじめた時など、こればかりはまだ馴れてゐなかつたので、時には泣き出したくなる程つらいこともあつた。病氣が治つて、學校に出るやうになつてからも、經濟が充分でなかつたため、室を借りて、何年も自炊生活をつづけた。靜かに讀書をしたらよいと思ふ朝の時間をも、洒掃や炊事に過してしまはなければならぬ。冬の日の、暗くなつて學校が退けて歸る時など、暗隅を手探りして、マッチをさがし、それから火を起し、飯を炊いてゐた。つらいと思ふことが度々あつた。けれど、かうした生活が、本を讀んでゐたよりも、どれ丈本當のものを私に教へて呉れたか分らなかつた。それから妻が自分の終りを自覺してか、晩年の一箇年を、私の許に來て過してゐた間、後の半分は全く臥床の儘であつて、雇人も色々の事情で、

淋しい長い
間の辛勞

來てくれることが稀であつたので、私は病人の看護と、炊事洒掃と、忙はしい學校の仕事と、三つの事を一身に兼ねてやらねばならなかつた。此の時は疲れて苦しいことが多かつた。妻が失くなつてから、子供が死んだり、母が永眠したりしたことが續いたが、其間の幾年、私は獨身で大抵は孤棲の生活を送つて來た。それは淋しい苦しい長い時間であつた。そんな辛勞のために、力を多く削られて、學校の仕事も疎かになつたり研究などは殆んど出來ないやうになつたこともあつた。けれど、私は、私にこの長い苦しみのあつたことを喜んでゐる。少しでも私に何事か分つて來て、小なる喜びが私の内に生れるやうになつたのは、私が喰ひ暴らした書物から來たよりも、この辛い生活から來たといはなければならぬからである。私に此の苦しみがなかつたら、私がどんなに本を讀んでも、それが私の生命の糧とはならなかつたのであらう。若い人々の様々

辛苦を経
た後の喜
び

辛苦の賜
物

な苦悶や疑惑をきいてやつて、多少とも、其人々の慰めとなり力となるやうな事を、言つてやることの出来るのは、私にこの苦しい経験があつたからである。弱小な私が、いくらかても、内心の權威と、理解とを以て、若い人々に向ふことの出来るのも、これがあつたからである。私がある時、この事を教室で話したときに、生徒達は、その沈痛の面に、涙をさへ浮べて聞いてゐてくれた。私に多くの缺點があるのを許して、彼の人達が、友人か兄弟でもあるやうに、私に近づき、私を信賴して呉れるのも、私に是等の経験があるからであつた。是等の経験が、今日の私の生活の土臺となつてゐる。私の考へや感じが、以前よりも、いくらか深くなり、未來をもつ人々の心とも、より近く接觸することの出来るやうになつたのは、この苦難の賜物といはなければならぬ。

教師の内
心の悩み

學校教師論

一一八

けれど私は薄弱な健康に悩まされ通してあつたと共に、また思想の薄弱に迷はされ通して來た。私の生活は根底の力をもつてゐなかつた。自分の生活が、其の根底を失つて、今日をも明日をも恃み得ない浮游の間にさまよつてゐるのに、どうして力強い自信をもつて、若い人々を導くことが出來やう。私の言ふことが、どうして權威あるものとして、彼の人々に受け容れられる筈があらう。教師としての私の生活も態度も、隙だらけであつた。一體何を標準として彼等の思想や生活を指導したらよいのであるか。彼等の殆んどすべてが、やはり自分の生活を支配すべき中心思想の見つからないのに悩んでゐるのである。彼等にとりても、在り來りの道德律や、既成の宗教は何の權威もないものであつた。彼等は自分達の頭上に手ひどく打下されるやうなものであるが、自分達の心の髓を、ひつくり返して、はつきりと用途を示してくれるものを得るでな

生徒にも
同じ悩み
がある

學校の教
育の無力

ければ、彼等は、本心から何事をもすることが出來ないでゐる。學校で教へられるものは、強制でなければ、空を吹いて行く風である。偶々其の聲が大きくとも、枝を揺り、軒を騒がすに過ぎない。彼等の心にも、頭の毛にすらも觸れない。止むを得ないから、表向きには心ならずも、規定に従つて行くが、さうでない場合は、情慾の迸る儘の行動をする。それがよいのだとは、彼等と雖も信じてはゐない。けれど仕方がないのである。彼等の行動が、屢々常規を逸して、學校に煩ひをかけるのは、多くかうした行きがかりからである。我等は教師であるといふ自覺から體面を氣にして、内心の空疎を強ても押し隠して、賢明らしい行動を作爲して行くのであるけれど、其の遠慮のない彼等は、事情の許す限り、氣儘な跳梁を恣にする。彼等の心を、うむとうなづかせる程の指導を、教師の側に爲し得る力さへあれば、彼等は喜び躍つて、其の方に向ふの

面體をの
み氣にす
る教師

人格教育と學校の教育

一一九

であるけれど、教師にそれが出来ないのである。何と云ふ不甲斐なき事かと自己を責めたことは幾度か分らない。到底人の師たるに堪えるものでは無いとさへ、屢々考へたことであつた。

解決のつけやうのないところから、私は學校の教育といふものと、眞實の教育とを、區別して考へやうとするやうになつた。人間を其の性格の根本から教育する。つまり全人の教育、これが眞實の教育である。これは人を教育し得る人物をまつて、はじめて爲され得る教育である。さういふ教育を爲し得る人は、人を教育しないでは居り得ないといふ願が、其の衷心に動いてゐる。さういふ人の周圍には、自然に其の教育を受けやうとて、磁石に吸引せられる鐵のやうに、多くの人が集つて行くものである。又さういふ人は、人を教育しやうと企てないでも、其の人の生活が、自然に周圍に教育的影響を及ぼすものである。昔の儒者などの教

昔の儒者の教育

學校教師必ずしも教育者でない

育はさうであつた。今日の學校の教師が、悉くさういふ教育者であるといふ事は出来ない。學校教師の中に、さういふ人もあるであらう。然して學校教師で無い人の中にも、左様いふ教育者があるのである。師範學校や、教員養成所で、三年か四年かかつて、養成せられたものが、直にさういふ教育者に爲り得やう筈が無い、第一に、自分達は、人を教育しないでは止み得ないといふ心から、教師になつたのではない。教師になるよりは、もつと外のよい望みがあつただけけれど、其れが遂げられないから、寧ろ衣食のために、止むを得ず教師になつたのである。そして報酬の増されんことを求めて、彼の校から此の校へと轉々してゐるのである。

今日の學校教師の大部分が、皆此の状態である。そんならそれは甚だ間違つたことで、みんなが悔改めでもしなければならぬかと云ふと、

學校教育は全人の教育である

さうではない。それでよいのである。今日の學校は、さうした教師によつて、其の目的を實現して行くことが出來つつあるのである。だが、學校の教育は、人その性格の根本から教育する、全人を教育するといふ性質のものではない。學校は只人性の或る方面だけを教育するところであつて、主として智性の方面の教育をするところである。即ち、日常の社會生活に必要な、智識や技能を收得させるところである。修身の如きものでも、全人格に影響を與ふるものでなくして、やはり社會生活に必要な方面の道徳的智識とその技能とを授けるだけのものである。學校教育はそんなものではないと云ふ人があつても、今日の學校は事實さうなつてゐて、又さうより外に行きやうは無い状態になつてゐるのである。本當の意味での教育は、それを爲し得る人によつてのみ爲されるもので、さうでないものが、いかに寄り集つて、方法を講じて、本當の教育は出來るもの

人を教育し得るものは人である

學校教育の限界を知らぬ

のではない。兒童や生徒の徳性の涵養は、其れを爲し得る教育者があつて、はじめて出來ることであつて、方法なども、其の人の個性に應じて、いろいろに案出されるべきものである。方法だけがどんなに講ぜられても、其の人を得ない限りは、何にもなるものではない。だから、學校は、其の職務の限界を知つて、其の範圍内に全力を傾注することをし、自分の力で無いやうな方面に、無用徒事の努力をしないやうにしたがよい。人が、己れの生活のために、或は商賣をし、或は大工業をしてゐると同じく、私もやはり、自分の生活のために、智識を收得して、學校に出て、それを生徒に傳へてゐるのである。生活のためにして居るといふ事が、決して賤しむべきことでも、耻づべきことでもない。立派に生活をして行くといふ事は、尊といふことである。商人が不正品を賣つたり、大工が建築を胡麻かしたりするといふことは、勿論悪いことであるが、利

働いて衣食を得ることは尊い事である

教師は謙遜なれ

益を多く得やうとして、業に勵むことは賞讃すべきことである。我等も出来る丈、智識を收得して、自分の受持つ方面に於て、出来る丈生徒を賢くしてやる。さうすれば、私が方にも損のあらう筈はない。自分が人を教育し得るやうな人格のものであるかどうか、それは心配するにはあたらぬことである。寧ろ、身を謙りて、大工や商人などと同列に自身を考へて、國民の師表だなどといふ柄にないことを考へず、不自然な無理なことを避けて、學科を教授するといふ一方面に、自己の全意識を集注するやうにしたがよいのである。生徒の人格の根本に觸れなければならぬなどといふ、分外のことを思つてはならないのだ。ただ人として、自分の生活を充實させて行くことは、之れは教師に限らず、商人にでも職人にでも必要なことで、それは自我の眞の満足のためにやつてゆかなければならぬが、何にも教育者だからと云ふ意識を、強いてくつつける

不自然と無理とを避けよ

人格は自然に他に影響する

必要はない。かやうにして、若しも自分に眞個の教育者たる素質が出来て居る時には、別にそれを意識することもなく、又人を導かうと務めなくとも、人格の生命は、必ず他に波動を及ぼすものであるから、自らにして教育は實現される。又若しもさういふ素質がないのに、強ても人を教育しやうとすると、そこには、不自然な作爲と虚偽とが行はれて、何にもしないよりは、却つて悪い影響を、生徒に及ぼすものである。自分もまた自我の分裂に苦しまねばならなくなつて来る。それは精神力の不經濟である。

作爲と虚偽とは悪影響を及ぼす

以上のやうな考に、私は落ちて行くやうになつて、幾分の心安さと喜びとを、其處に感ずることが出来たのであつた。この考を、二三度雑誌などで発表したところが、若い教師達の中には、非難をする人もあつたが、多年眞面目な教員生活に苦しんで来た人々からは、同感の意に感謝

の言葉をさへ添へて、手紙を寄越されたりした。

一〇 生死の問題

短かい教
員生活の
春

私の教員生活の春は、極めて短かい時期であつた。夏は來ないで、すぐに秋になつて、嚴冬の時期が長い間つづいた。自分の心からとは云ひながら、あの幾年間の、私の身世の苦しく惱ましかつたことを、愚痴だと知りながらも、回想しないでは居り得ない。

草の芽が
漸く出た

だが、私の永い冬の時期にも、和煦たる日光が、絶えず一筋の輝きを投げてゐた。そして私の生涯にも、漸うやう待たれた春が回つて來た。暗く冷たかつた私の心にも、温かい光りがさすやうになつて來た。私には何か手がかりが出來たやうにも思つた。生徒の事情もだん／＼に分つて來て、彼等に接して行く上のコツも分つたやうに思つた。今まで、どうかすると怖いことがあつたり、又は憎いことがあつたりしてゐた、大

十年の苦
心空しか
らず

きく年をとつてゐる師範學校の生徒も、子供のやうに私の眼に映るやうになつて來た。如何やうにも、彼等の心を左右することが出来るやうになつたと、自分にも思はれた。十年の苦心は空しくなかつたと私は思つた。私は重い鶴嘴をもつて、手に血豆をにぎりながら、油汗を垂らして喘ぎく、石の多い土地を、長い間耕して來た。やつとそれが平坦になり、柔かになつて、私の下した種子が芽を出して、私の前には、一面の綠野が出現するやうになつた。

再び家庭
生活に入
る

個人生活の上においても、私は、幾年ぶりにか、再び家庭の人となることが出來た。之れからは、收穫のために、無用の思ひ煩ひをすてて、いそしまうと思つてゐた。

再び發病

ところが、花が咲いたと思ふ間に、嵐が來て、やがて杜鵑血に鳴く五月雨になつて、人を驚かすやうに、私は又病氣になつたのである。無論

死の宣告

不治を宣告せられ、病院に荷はれて行つたが、醫師や看護婦達に、私の死が日々待たれてあつた。

死の平安

自分も今度はいよく死ぬか知れぬと思つた時、私には寧ろ死の平安を望んで、それを待つ心があつた。私の近年の生涯は、それに執着するには、餘りに苦しいものであつたのである。私は一時随分と荒んだ生活をもしたのであつた。それが私の健康を破つて、かうなつたのでもあるらしい。私は誤つた私の生活を繰り返すよりも、靜寂の平安境に召されて行つた方がよいのであらう。だけれど、私は死を希ふのではない。私は一切をわが生命の親に任ずるのである。私は私に來らんものを、靜かに待つてゐやうと思つた。早くよくなりたいたも思はなかつた。死でも回復でも、自から私に來るものが、私にとりて最も善きものである。私は只待つてゐればよいのであつた。病氣は随分苦しかつたけれど、心は

靜かに來
るものを
待つ

安静であつた。治療のことは、醫師に任したきりて、何處が悪いのか、経過はどうなりつつあるか、少しも氣にもかからないので、尋ねても見なかつた。よくなつてしまふまで、私は何處がどう悪いのか、ちつとも知らずにゐた。

醫師は、私の病狀の危険な割合に、私が平氣でケロリとしてゐるといふので、驚いてゐたそうである。不可思議な人だといつてゐたそうである。あれならば持ち直すであらうと言はれてゐた、と之れもよくなつてから、或る人が私に言つてきかせたのであつた。

私は又、こんな事をも思つてゐた。私が十年の間に、爲し得なかつた事を、私は死ぬる事によつて爲すことが出来るに違ひない。私の死といふことは、私が十年間骨折つてやつて來たよりも、より以上の何物かを生徒達に與へることが出来るのだ。死は、生涯の完成で、又事業の完成

死して爲す事あり

である。生きてゐる間に成されなかつたことは、死によつて成されるのだ。死は、我等が生涯の最後の輝きであるのだ。

それにしても、一切を後にふり捨てて、私に嫁いで來たばかりの妻が今、私に死別せねばならぬことを思つた時には私には容易くは解決がつかなかつたが、しかし、一切が我にとりて美きものであると、信ずることの出来る私は、私が死ぬるとしたら、それは私が生てゐるより、妻にとつては幸福のことであらねばならぬ。もとより彼女は、肉の生活の上には、大なる悲慘と痛苦とを受けねばならぬことであるけれど、彼女にとりて最も大事な、その靈の生活の上には、全體に於て彼女を幸福にするやうな、何物かが、きつと與へられるのだ。終に私はかう思つて安んじてゐた。

一切が我が爲めに善し

私が病苦を堪えて、靜かに臥してゐるといふことが、多くの卒業生や

目に見えない活動

生徒にも、何等かの強い感動を與えてゐるやうであつた。此の前の病氣の時にも、同様で、病苦と戦つて行きつつあつた私の生活は、私が彼等の前に立つて、煮え切らない仕事をしてゐたよりも、ずつと力強いものを、彼等に與へてゐたことは、事實によつて知ることが出来たのであつたが、今度もさうであるやうに思はれた。

かうして寝てゐても、自分の生徒に、何等かの善い影響を與へることが出来ないのであつたら、よし、私が壯健で、駆けずり廻つて、聲張りあげて、彼等の前に活動をしてみたところで、何等眞の作用を、彼等に及ぼし得る筈のものではない。教育は、精神の作用であるから、相見ることがなくとも、こちらの精神が、内部にあつて、強く何事をか意識さへしてゐれば、それは必ず他に影響するものである。寝てゐるといふことが、本當は大なる活動であるやうでなければならぬ。こんな事をも思

寝てゐるのが活動

つたりした。實際病苦に堪えて、心を平靜に保つてゆくといふことは、大なる活動であつたのである。

かくして、私は、人々の驚きの前に、再び起つことが出来るやうになつた。その時、私にはまだ生きてゐて爲さなければならぬ仕事が残つてゐただと、私は思つた。

一一 教師と生徒との接觸

教授による訓育

教師の仕事は、教授をするといふ事である。教授するといふことが、學校が受け持つ教育の方面である。かう云ふと、教授だけではいけないそれよりは訓育の方が大事だと云はれるであらうが、學校教育では、教授を措いて何處に訓育があるべきであらう。教授によつて訓育が施されねばならぬのである。教師が自分の學力の修養や、生徒への教授を好い加減にして、訓育呼ばりはあつたものでないのである。

一體、教育と云ふと、學校が其の全部を執り行ふものであるかのやうに思はれてゐるけれど、學校は只其の一部面を握つてゐるのに過ぎないのである。人が人となる爲には、各種の方面から刺激によつて教育を受けてゐる。學校の施す教育は、其の中の一部面で、教授といふことによ

つて、人を人たらしめるための動作の一つに參してゐるまでである。人は決して學校教育だけで、人間に成ることは出来ない。

智識や技能を授けて、それによつて人間性を養ひ育てて行くといふのが、學校の仕事である。若し訓育といふことが、教育の本體であるとするならば、學校は教授といふ手段によつて訓育を施さなければならぬのである。

教授は教室内に限られてはならぬ

併し、教授といふことは、單に教場内で、教科書を教へたり、講義をして聞かせたり、又小なる實驗をして見せるだけのものだと思つてはならない。教授の材料と機會とは、教場や、校舎の壁によつて、しきりをされるべきものでなく、寧ろ其の壁といふものを徹去してしまつて、材料も機會も、廣い世間、大なる自然の中に求められなければならぬ。教師と生徒と相接觸するところには、それが山の上であらうと、野の中

であらうと、其處には必ず教授の材料と機會とが、無數に不斷に存在してゐる。教師は到る處で、其れ等の中から最も適當なものを精選して、教授をするといふことを心がけねばならぬ。だから、教師と生徒とは、出来るだけ各種の場處で、出来るだけ多く相接しなければならぬ。生徒と共に遊ぶのも教授である。共に食するのも教授でなければならぬ。共に洒掃をしたり、庭の草を抜いたりすることは、最もよき教授の機會である。

教師と生徒との相接するのには、其の間に障壁が設けられではならぬ。教師も虚心で生徒に接し、生徒も虚心で教師に對するやうでなければならぬ。互に腹心を打あけて相接するところに、教育は勿論のこと、教授もはじめて其の本當の事がなされるのである。教師の側に、威嚴を保たうといふやうな意識があつたり、生徒が教師の前に自己をつくらふとい

教師と生徒との間の障壁を撤せよ

全我との接觸

ふやうなことがあつては、其の間に超ゆべからざる障壁が生ずるので、教育も教授も本當に行はれるものではない。生徒に何事でも憶面なく打あけさせることを、教師はしなければならぬ。兩者の接觸は、全我と全我との接觸でなければならぬ。けれど、此の事は、實際には中々に行はれてゐない。教師も己れの全人を以て生徒にのぞまず、生徒も己れの全人を以て教師に對することをしない。どちらも、自分といふものを見えないやうに奥に引き退めて、都合よく取りつくろふた、理知といふやうな方面だけをもつて、對し合つてゐる。人間と人間との接觸ではなくして、頭と頭の突き合せになつてゐる。生徒に悪く見られまいといふのが教師の腐心するところで、教師によく思はれやうといふのが、生徒の常に心を配つてゐるところである。さうして睨み合つて、教師は生徒に何か悪いことはないかと目を鋭どくし、生徒は教師のアラを見出すこと

知人性と理

學校教師論

一四八

にばかりつとめてゐる。教師も理知の眼をもつてのみ生徒を見てゐるから生徒の人間性は、其の儘には教師の眼には映らない、生徒もまた、理知の眼を教師に向けてゐるのだから、教師を批評することは出来ても、教師に親しみを感ずることは出来ない。小學校の兒童になると、もとより無心にして教師に接してゐるのであるから、教師が善い人であるか、悪い人であるのか、どんな性質の人であるか、そんなことは分らない。只己れの心のすべてをあげて、教師に親しんで来る。それで教師が善い人に見えるのである。家庭でも、幼兒には、父や母や、皆慕はしい、なつかしいよい人にみえる。理智を撤して、我れのすべてをもつて、父母に對してゐるからである。親密のあまり、對者を批評するやうな餘地は全くないのである。ところが、中等學校の生徒になると、さうではなくなる。中學校などに行くやうになると、子供の父母を視る眼も變つて来る。

人格を以て接しな
いて理知な
るを以て見

學校教育に於ける
理知の發達
なる發達

教師と生徒
との反撥

學校の教育が、子供の全人格に作用せず、其の理智の方面ばかりを取扱ふやうになるところから、此の方面だけが著るしい發達を遂げ、人間性は其の奥に押し込められてしまひ、生徒は育て上げられた理智の眼を輝やかして、教師に對するやうになり、次第に教師と生徒との間が遠くなり、其處に互の心の交通を妨げるやうな障壁が生じて来る。かうなつた少年は、家に歸つても、父母に對して、さういうやうな態度をとるやうになり、父や母の缺點に眼をつけるやうになつて来る。生徒は出来るだけ、教師の前を避けやうとする。教師の前に立たせられた時には、究屈を感じないで居られなくなる。自分といふものが、そこではずくんでしまつて、言ひたいことも言へなくなる。心が發動しなくなる。自分一人で居る時には、分つてゐた事でも、教師の前に出ると、それが分らなくなる。眞實のことは言ひ得ない。都合よい間に合せの事を取りつく

教師と生徒との接觸

一四九

ふふて、教師に答へたりする。教師は、生徒の其の答をもつて、生徒を判断しやうとする。生徒の本當のところは、教師には分らぬやうになつて来る。教師のする、生徒の性行の評價に錯誤が生じて来る。生徒はいよく教師といふものを信じなくなり、益々教師から遠ざかつて行く。かうなつては、教育は行はるべきものではない。しかし大抵が斯うなつてゐるのである。教師は思ひ切つて、自分の前の障壁を取り壊して、自分の赤い心をもつて、生徒の心情に肉迫して行くことをしなければ駄目である。彼等の前に自己の權威を墜し、彼等に馬鹿にされるのを覺悟して、裸體で彼等の中に飛び込むことをしなければ、彼等の心腸を握むことは出来ないのである。

教師は生徒の友人となつてやらねばならぬ。教師自身の缺點が、彼等の理智眼に映るのでなしに、彼等自身の缺點に、びたりと抱きつくや

生徒の友
達となれ

教師の仕
事の面白

うでなければならぬ。さうなつて来た時、生徒ははじめて教師の前に、自己の一切をさらけ出してしまふやうになる。さうなつてはじめて、本當の教育に手が着けられるので、教師の仕事の面白味か、こゝからはじまるのである。

私は度々失敗に出會しながらも、此の事につとめて来た。生徒は私にはどんな秘密をでも打開けて来るやうになつた。

或る夜、師範の四年級の生徒が一人、密かに私を訪ねて来た。改まつた態度で、暫黙つて坐つてゐたが、「先生、私は生命を捨てやうとまで思ひ込んで居ることを、先生にお話しやうと思つて来たのですか、先生は聞いて下さいますか、又此の事は誰にも言はないで下さることが出来ま

すか」と云ふ。餘りに引き締つた其の様子に私はドギマギした。自殺をしやうとも思つてゐるのではなからうかと思つた。聞いてみると、彼

生徒間に
行はれる
秘密行為

には一人の戀人があつた。それは同じ寄宿舎にゐる下級の生徒であつた。ふだんぼんやりな私は、はじめて同性戀愛といふことが、彼等の間に盛んに行はれてゐるといふことを知つた。彼は其の相手と、一日でも一刻でも顔を合はさないでゐることは出来なかつた。そして彼の最も怖れるところ、今夜特に私を訪ねて、私にどうかして貰ひたいと思つたのは、彼は、もう幾週間の後に卒業をしなければならぬ。さうなると、彼は其の相手と離れてしまつて、會ふことができなくなるといふことであつた。それは死ぬよりもつらいことだといふ。それをどうしたらよからうかと私に相談に來たのであつた。私は彼等のかうした話を、黙つて聞いてやらねばならなかつた。然してこれを叱り得る權威は私には無かつた。彼の話を聞いてやつた後で、多少は誇張して、かういふ事件の道行きを詳細に慘憺たる光景の中に、私は語り込んで行つた。其の間、彼は自分の

膝を見詰めたり、私の顔を仰いだりして、斷えず身を悶えてゐた。最後に私は少しく力強く言つた。「君が若し私の子であつたら、私は無理にも私の手を加へて、この深淵の崖から、君を引き戻すのであるが、私にはそれだけの親切心が起り得ない、私は君に對してそれだけの愛をもち得ないのだ、だから私はどうもしない、君の仕たいまゝにしたまへといふだけである」。此の時彼は疊に頭をつけて、「どうぞ先生、どうもしないでゐて下さい、さうでなければ私は死ぬるです」と云ふ。「どうもしはしない、それは君にとつては不幸なことであるけれど、私はそれを爲し得ないのだ」。こゝまで言つたとき、彼は「先生、私はもう歸らして貰ひます」と云つて、立つて玄關を下りかけた。私はそれを送つて、「だが、君のその感情の終局は私の言つた通りになつて行くのだ」と、念を押して言つてやつた。一週間ばかりして、彼は再びやつて來た。今度は落ついて、

顔も晴々としてゐる「先生、御安心なさつて下さい、先生の御言葉をきいてから、二人はもう泣いて手をきつてしまひました、もう關係を斷つてしまひましたから、どうぞ安心をなさつて下さい」と云つて歸つて行つた。

かういふやうなことは度々あつた。けれど、彼等は中々自分を打あけやうとしない。それは打あけたくないのではない。打あけたいのである。打あけて自分のすべてを教師に知つて貰ひたくてたまらないのである。それで打開けやうと思つて、教師をその自宅に訪問する。すると何だか教師の態度に、こだわりのあるのを直感して、とう／＼打開けることが出来なくなつて歸つてしまふ。話をしかけてみても、教師の心が、冷やかであるのに氣づいて、氣がつまつて來て、中途であいまいにして切り上げてしまふ。私のところでも、度々さういふやうなことがあつた。生

徒は必ず不満足な顔をして立去つて行く。或る時、生徒がまた私を訪ねて來て、かういふことを云ふ。

もつと自分先
達を知つた
いて貰ひた

先生達には、生徒の様子は分らないのです。だあれも先生達の前に本當のことを言つてゐるものはないのです。みんなお上手を使つてゐるのです。だから、我々同志が見てゐるのと、先生達の見てゐられるのとは丸で違つてゐるのです。我々の間では、随分勝手なことをしてゐるものが、先生達に評判がよかつたりするのです。猫を飼ふことの上手なものが、先生達にはよく思はれるのです。何の某などは、あんなことで學校を出されたりしたのですが、彼れ位、みんなの爲に骨を折つてくれたものはないのです。私共は、どうかして、もちつと先生方が、私共を理解して下さるとよいと思ふのです。さうでない、こんなにして學校に學んでゐても、面白いことも何にもないのです。張り合も何にもない

のです。先生方には、なぜあんなに、私共のことがお分りならないのでせう。

それには、私はかう答へてやるより外にはなかつた。それは君達の無理といふものだ。人の性質などいふものは、そんなによく分るものではない。自分に自分自身が本當に分らないのではないか。それに何百人といふ君達を前に控えて、仕事は多いし、君達ばかりを見てゐることは出来ない。一週に二時間か三時間位、接するに過ぎないのに、どうして本當のことが分るものか。先生に本當のことを分つて貰はうなどいふのは無理な望みである。かういふ中等の學校では、先生に自分を分つて貰ふといふことは出来ないものだと思つてゐなければならぬ。勿論學校は學校として、君達の教育のために、出来るだけのことはする。けれど、私がいつも云ふ通り、かういふ組織の學校では、教師が生徒の性格の全部

をどうするといふことは出来ないことである。君達も、學校や先生をのみ頼りにしないで、自分で自分の本性を教育することをしたがよいではないか。理解力はあるし、本を讀むことも出来るのだから、自分で研究もし、思索もしたらよいことである。我々は、君達が小學教師たるに必要な智識や技能は、出来るだけよく教へてやることにしてゐる。君達も先生方からそれだけのものを授けて貰ふことができたなら、それでよいことにしなければならぬ。學校といふものはさうしたところなのだ。それでも、君達にはさういふ智識技能以上の、根本の要求がある。それは必ずしも學校によつて充されなくともよい。それには、よい人のよい書物もいくらもある。さういふものについて、學んで行つたらよいのである。學校の教師といふものが、聖者でもなからうし、大導師でもなからうから、君達のすべての要求に應ずるといふことは、出来るものではない。

いのだ。それでも、先生方は、精力の限りを盡して、君達のために盡されてゐる、君達はそれに満足しなければならぬのだ。人に誤解されたり悪く思はれたりしたとて、それが何であるか。君達の本領はそれでどうもなりはしないのだ。先生の眼にどう映じてゐやうと、自分で自分を守つて行くことが出来たら、何も憂ふべき所はない筈だ。あんまり先生を恃みすぎるからいけないのだ。それは甘へてゐるといふものだ。自分で自分を教育するといふことが、君達にもう出来なければならぬ。さういふ愚痴は捨ててしまつた方が、よくはないか。

かう答へてはやつたものの、私は彼等の言葉に胸を突かれたやうな心地がした。

一一一 藝術としての教育

藝術家の
仕事

藝術家の
眼と世人
の眼

名畫家が、自然や人物を描くには、事象の内部に深く潜んだ、其の心又は本性とでも云ふべきものを直感し、之を捉えて、之を畫面の上に、色や光や線の配合によつて、現はし出すのである。詩人が、自然の事象を歌ふのも同じである。普通人の眼は、事象の表面、偶然の形態にのみ囚はれて、必然に内面に隠れてゐる生命其のものを観取することが出来ない。従つて自然人生の本來の意義、生命の喜びに輝いた其の眞の姿といふものは、普通人の眼には映じないのである。普通人の住んでゐる世界は、往々にして、平凡乾燥落寞無味の世界である。驚異も嘆美も渴仰も無い、死灰の如き世界である。詩人や藝術家や、宗教家の、此の土に於ける天職は、普通人に眞實の世界を、具現的に啓示して、彼等の生活

藝術家の
職分

をより輝いたものたらしめることにある。是等の人々は、普通人の視力の及ばない事物の奥にまで、其の天才の直感力をはたらかすことが出来るので、自然及び人間生活の奥底を流れてゐる眞實の生命を、普通人が眼に視、又心に描くことの出来る具現的のものと爲して、普通人類に提供するのである。

普通人間の眼には、朝に花咲いて夕には蒞りとられる一莖の野の草に過ぎないものに、大天才者は、世界と人類に對する天父の限りなき愛を感知することが出来て、之を人類に啓示したのである。普通人間が、看過してゐる、平凡な形象の中に、天才者は悠久の美を認めて、これを詩や繪畫と爲して、人類に與へてゐる。普通人間が賤しみ輕んじてゐる一介の乞食にも、輝いた生命の美が認められて、それによつて乞食も救はれ、それに對するすべての人類も救はれてゐる。

天才の者は
平凡の者に
事物の眞實
を觀る美

各畫家の仕事は、目に見えざる客觀の姿を、目に見える色や光や線の上に表現することである。けれど、畫工の仕事はそれに終つては居ない彼の仕事は、外物を具現することであると共に、其の作品の上に、自己を表現することである。事物の生命を具象化することによつて、自己の生命を創造することである。書くといふことは、自己の表現であつて、又自己の創造である。書くことは、自己を表はすことであるばかりでなく、書くことによつて、自己を今一步より深いところ、又はより高いところまで創造して行くことである。藝術家が創作をするといふことは、藝術家の生命の歩みである。外物を寫すのではなく、自己を表はすのみでなくして、自己を獨創の力で造つて行くことである。

我等は、名畫に對したとき、其處に自然及び人物の、眞の姿の輝きを見る。それと共に、作家の鮮やかな個性と、其の生命の辿りとを見る。

創作は自
己創造で
ある

事象の姿の最も活き／＼と示され、作家の個性の其の上に最も鮮明に現はされてゐるのが、名畫である。詩人の場合も、宗教者の場合も、同じである。

教師の仕事も、また同じであると見なければならぬ。教育をするにも、教授をするにも、教師の目を着けねばならぬところは、兒童や生徒の外部の形ではなくして、其の内心でなければならぬ。内部に具有せられて、未だ形にあらはれ得てゐない、其の本具の性情であらねばならぬ。不完全な醜い其の心の奥に光つてゐる、人間本來の智能性格であらねばならぬ。それに目を着けて、それに作用を施して、それを外の形の上に現はし出すのが教育の仕事であり、教授の任務である。人を人と爲すといふことは、隠れて現はれざる人間の本來の姿を外部に向つて活動することの出来る形にまで育て上げて行くことである。麥の種の中には、麥に本

藝術家としての教師

教師の百姓の仕事や園丁の仕事と違ふ

具の胚子が潜んでゐる。それが外界の刺戟にあつて、本來の姿に應ずるやうに展び育つて行くのである。麥を作る人は、麥のこの本性に順應して作用を施して行くのである。だから、教育は、農夫が麥をつくるやうなものであると、昔の教育を説いた人々が言つてゐる。けれど、百姓が麥を作るのと、教師が生徒を育てるのは同一ではない。百姓の手によつて、麥は其の本來の形を發達さしては行くが、其の形の上に百姓の個性をとり入れるといふことはしない。其の麥を見て、之を作つた百姓の個性を知ることが出来ない。

それ故、教師の仕事は、百姓の仕事に似てゐるといふよりも、藝術家の仕事に類してゐるといはなければならぬ。我等は作品を観ることによつて、作家の個性を知ることの出来るやうに、教育された人間をみて、それを教育した人の個性を知ることが出来るのである。生徒は教師にと

作品によつて作家を知

りては、其の創作品である。作家の個性のあらはれてゐない作品が、藝術として價値のないのと同じく、教師の個性が生徒の上にはあらはれてゐないとき、其の教育は價値の乏しきものであつたと見られなければならぬ。

生徒を教育するといふ事は、教師にとりては、それが自己の生命の表現であらねばならぬ。畫工がキャンパスの上に自己を表現して行くやうに、教師は、生徒の内部に自己を表現して行かなければならぬ。教育とは人を作るのではなくして、自己を作ることである。然して單に自己を他に傳へることではなくして、人を教育して行くといふことは、自己の生命の歩を進めて行くことである。人を教育すると云ふことは、自己の創造である。藝術家が會心の傑作を成し得たときには、自己の生命にも換え難く、その作品を愛し尊重する。彼は決して金錢をもつて之を賣ら

人を教育
すること
は自己生
命の表現

獨創の喜
び

うとはしないのである。自己が教育し得た生徒は、教師にとりては、自己の生命である。自己が創造したものは自己其ものである。自分の全生命を傾注して作りあげた生徒は、自分から離すことのできない、自分の生命其のものである。藝術家が、獨創の力を打込んで、苦心の大作を仕上げ得たとき、藝術家の心は、どんなに大きな喜びをもつて躍るであらう。彼にはもう他の一切の何物も入らないのである。彼の生命は之によりて、一つ大きな飛躍をなし得たのである。人間の喜びは、抵抗に勝ちて、我が生命を躍進させ得たときに、最も大なるものである。眞の藝術家は、これにのみ活きて、ここにその生命を創造しつつ行くのである。教師の喜び、教師の生活、教師の人格の躍動も、またここにあるのである。教育をするといふことは、自己充實であり、自己の向上であり、自己の擴大である。自己を離れて、眞の教育はあり得ない。

生命の飛
躍

自己を離
れて眞の
教育はな
い

教師は生
徒の中に
生きてゐ
る

自分が教育したものの中に、自分が生きてゐる。眞に人を教育するこ
とによつて、教師は、自己を不朽にすることが出来るのである。

或る時、私は汽車の中で、一人の卒業生に出會つた。彼は兒童に對す
る自分の愛の喜びを語り、其の顔は輝いてゐた。けれど話が一轉すると
彼の顔は曇りを帯びて來て、かうして熱心にやつて、どうかして、彼等
が卒業するまでも、自分の手で世話をしやりたいと思ふのに、今度突
然他に轉勤を命ぜられたのである。何故の轉勤であるか自分には分らな
いが、こんなことをされては、熱心にやらうといふ氣も何もなくやつて
しまふ。折角骨折つてやつて來たことも、駄目になつてしまふのだから
いやになるのだと語る。私はそれを聞いて、この若い教師に同情せざる
を得なかつたが、こんなことから自棄を起させてはならぬと思つて、慰
めてやつて、けれど失望したりなんかしてはいけない。よし一年でも、

只だ一日
の仕事に
最も自己
の善を爲
せ

ただの一月でも、自分が仕事をする以上は、其の仕事に自己の全力を打
込むことをしなければならぬ。ただの一日でも、兒童に接するからは、
其の一日の中に自分の興へ得る丈のものを興へておく。ただの一會見に
でも、相手の人に自分を深くつき込むことをしなければならぬ。たつた
一日一時の接觸でも必ず深い強いものを其の人に残さなければおかぬと
いふやうな覺悟で、何時も居たがよい。自分の力でどうともすることの
できぬ事は、仕方がないから、それはあきらめておくことだと話した。
さうですねと彼はうなづいて、自分の教へた兒童が、だん／＼數も殖え、
大きくなつて、社會のいろ／＼な方面に出て働いてゐるのを見ると、全
く嬉しいですと云ふ。さうです。だがそれだけでなく、自分が教へた
兒童の中に、自分が喰ひ入つてゐて、一人の自分が、多くの兒童の中に
生きて、彼等が働いてゐるのは、自分が働いてゐるのだといふ事の出來

兒童の中
に生きて

るやうに、平生兒童に接して行かれよと、景氣のよいことを云つてやつて別れたことであつた。

病中の慰

往年、私が病に苦しんで、永い間臥してゐた時、薩南で教へた生徒達から、度々手紙が來た。それには、既に小學教師となつた彼等の生活の有様が、詳かに記してあつた。私が彼の人々に接してゐた間は、僅かであつたけれど、私が熱い心をもつて、力強く彼の人々に教へてゐたことは、私が去ると共に消えることなしに、彼の人々の心に根をもち、芽をもつて、それが彼の人々の内部に力となつて、人々は、私が願ふ通りに、私が教へた通りに、兒童を教育もし、各々の境遇にも處して行つてゐた。私の與えたものは小さかつたけれど、それが人々の内部で、私が思ひもかけ得なかつた程の大きさに成長して、淳朴な、寂寞な、薩南の僻郷の諸處にあつて、輝いて生きてゐる。それを思ふことが、やがて死しても

行くであらうと思はれる、私の病床の最大の慰めであつた。自分がかうして臥してゐるけれど、自分がいくつにも分身し働いてゐるのであるやうに思はれて嬉れしく、私は又病苦を忘れて、長い手紙をも、彼の人々に書いて送つたのであつた。

一三 用意と不用意

單に一教科を擔任するに過ぎないで、一週に二時間か三時間のみ、生徒に接するだけの教師には、以上に言つて來たやうな仕事は出來難いのである。だから、教師は折ある毎に、生徒に接することをしなければならぬので、其の接する如何なる場合も、各畫工が繪筆をとつてキャンバスに向ふ時の心もちを以てしなければならぬ。教師の一舉一動、一言語でもが、キャンバスの上に無意味の繪具をすりつけることでないやうに心されねばならぬ。

教師が一學科の擔任教師であるに過ぎないところから、生徒の教養の全體をとり扱ふことの出來ぬにしても、若し、其の教師の或る時の一言、或は一動作が、ただ一人の生徒にでも深い感銘となつて残り、其の人の

無意味にも一筆下すな

生徒の生涯を支配する教師の一言

生涯を支配するといふことがあつたら、ただ其の一事によつても、其の教師は、眞に人を教育し得たといふことが出来るであらう。

或る時、一人の卒業生が、私に向つて、四年間、先生の教育の講義を聞き、一年間修身のお話をききましたが、何を教はつたのか、今では全く忘れてしまいましたと云ふ。私は何だか寂しい心地がした。すると、彼は、だがつた一事、先生のお話の中で覚えてゐることがあります。それは特に深い感動を私に與へてくれました。此の一事だけは、私は生涯忘れることは出來ないと思ふのですと云ふ。私の心に一點の光が點ぜられた。それは何事であつたかときいてみると、私の方では、そんなことも云つたのであつたかなあと思つた程、偶然の私の言葉に過ぎなかつた。

偶然の力

偶然の一語、偶然の一舉一動。それが生命をもつて、人の心を活かし

輝かすのには、其れ産をみ出すべき長い間の苦しい経験と、深い思索とが其の背景を爲して居なければならなかつた。不用意な一言一行は、大なる用意から出てのみ、其の力を作用するものであることを私は教へられる。

私共は、的に向つて、多くの空しい箭を放つ、一矢的中するまでに、如何に多くの箭が捨てられねばならぬことであらう。其の的中した最後の一矢は、その一矢の力での的中し得たのではない。空しく放れた多くの矢の力が最後の一矢に集注せられて、的を射破り得たのである。畫家が一枚の畫を仕上げる迄に、幾枚の下書きが裂き捨てられるか分らない。百發百中の妙技に達し得ない私共は、平生空しい努力を繰り返しても、最後の一矢の的中を期して、手にせる弓箭を捨てゝはならない。

宇治黄蘗の山門に、『第一義』と、肉太にかゝれた雄渾な文字の額がか

最後の
矢の中

宇治黄蘗
の山門の
額

「第一義」

ゝつてゐる。あれは黄蘗の六代目の住職であつたか、私は今其の名前を思ひ出すことが出来ないが、其の住職が大隨長老の前で筆をとつたのである。一代の精氣をこめて、第一枚目をかいたのを、長老が見て、駄目だといふ。それを引き裂いて、更に心を込めて、第二枚目をかいた。長老はまだくゝと云ふ。三枚目をかき、四枚目をかいた。引き裂き引き裂きしては、五枚目六枚目と、益々精根を凝らして書いて行つた。長老は駄目々々、まだくゝ駄目だといふ。かうして八十八枚までかいては裂き書きては裂きした。筆持つ人の腕は痛んで來、身體は綿のやうに疲れる。頭はボンやりとなつてしまつて、眼がくらつくやうになつた。其の時長老が用を達しに坐を立つた。其の暇にと、無我無識に筆をとりあげて、一氣呵成に書きなして、待つてゐると、歸つて來た長老は、立つた儘、それを見詰めて、「出來た、妙だ、」と叫んだといふ。今日山門に掲げら

用意と不用意

れてあるのは、かうして八十九枚目にかゝれたものである。八十八枚の空しい努力を犠牲にしたあとで出来上つたものである。私は松村介石氏の書かれてゐるものの中で、この話を讀んだことがあつた。

私共が、生徒の爲めにと工夫を凝らして、語りもし教へもしたことが、必ずしも彼等を動かし得ないのだといふことを経験して來た。却つて不用意の一言が、意外の影響を彼等に與へる。教室で嚴肅な態度で言つて聞かせたことよりは、何かの談笑の間に、思はず教師の口から出た言葉が、存外に強く生徒の心をとらへることがある。生徒によき模範を示すやうにと、教師の意識してやることは、割合に生徒の動作を支配し得るものでなく、無意識から出た教師の行動が、却つて、より大きい影響を及ぼすものである。

私が此頃まで勤めてゐた學校は、一時模範校だと、世間にも喧傳せら

無意識の
力不用意
の力

教師の
意識して
爲す作
とるこ
外に存
ないは

れて參觀者などの多いことがあつた。この學校の特色の一つは、生徒も職員もよく労働をすることだと云はれてゐた。或る時、某師範學校の首席舎監をしてゐる人が、この學校に參觀に來られた。其の日は丁度土曜日で、大掃除をする例日になつてゐた。生徒等はバケツや雑巾等をさげて駆け廻つてゐる。職員は校長をはじめ、皆襯衣一枚になつて、雑巾を手にして各々其の持場々々の清潔をやる。參觀人は此の有様を見て、成程と感心した。自分の學校では、生徒がちつとも掃除などに精を出さない。それは教師が生徒に命令するばかりで、自身にやつて見せないからだと氣がついて、それから、自分の學校に歸つて、生徒に掃除を命じた日には、舎監自身も白い襯衣の儘になつて、舎監室の窓を掃いたりしたけれど生徒は一向それに見習つて、掃除をはげんでは呉れない。そればかりか、却つて舎監を非難するやうになつた。舎監はどうしたものだら

うと首を捻つた。そして同僚の一人に其の事を相談してみた。すると、其の同僚が、「そりやいかん、それは止めたまへ、生徒にだけやらしてあげばよいのだ」と云ふ。其の云ふことが聞えぬので、舎監は、自分が參觀して来た學校のことから話すと、其の人は、「それは違ふ。そりや君の考が違つてゐる。あの學校では生徒に見せやうといつて、あゝやつてゐるんぢやないんだ。あの學校の校長なんか、家でも土を擔つたり、米を搗いたり、風呂の水を汲んだりして働いてゐる。楽しんでそれをやつてゐるのだ。その平生の勞働のほんの一つばしが、學校でも出て、それが自然と生徒の眼にもはいるのだ。君のはどうぢや、家では妻君や下女をこき使つてゐいて、自分は己れの靴すら磨かず、そして學校でばかり之れ見よと云はんばかり、生徒の前で雑巾がけしてみたところで、どうもなるものか。止めつちまへよ」と云つたやうである。

明治先帝
陛下の御
徳

明治先帝陛下が、御儉素であらせられたことは、皆人のよく知るところである。陛下の御居間に一折の金屏風があつた。それは 孝明天皇よりの御譲りのもので、もう古びて、金も剝げたところなどあつたが、陛下はしまへまで大事にそれを御用ひ遊ばされた。又 陛下の御椅子の下の虎の敷皮が破れてゐたのを、侍従の人が、新しいのと御取り換えするやう申上げたところが、陛下には、宜しい、繕つてあげ、と仰せられる。それで東京中を探して、その虎の皮に似寄つた犬の皮を求めて、お繕ひまゐらせたと云ふ。陛下の御手許に、いつも襦袢などの入つたポール紙の函が置かせられてあつた。何をお納めになつてゐるのか、誰も知るものはなかつた。ところが、御崩御の後に、拜見する人があつて、其の中には、物の包み紙に用ひられた反古を丁寧にあたみ打つて、それ

を綴つて、平生御詠み遊はされた御製を御記しつけられてあることを知つた。陛下の御用ひになつたゐた卓子は、普通の學校や官衙で使つてゐるものと變りはなく、その上に、いつも丸善のインキ壺を置かせられてあつた。更に又、陛下の御居間の障子は、つき張りをさせられたものであつて、これも御崩御になるまでは、拜し奉つた人があまりなかつたと云ふ。

私はここに又、沼波瓊音氏の御厄介になるのであるが、氏は其の徒然草講話の中に、先帝の御徳を讃えて、陛下は、決して、人民に質素を見習はせやうとて、かく遊ばされたのでは無く、全くかういふ質素のことを御心からお喜びあそばされて、なされたことであつた。それは、御崩御になるまで、かういふ御儉素の事實が、廣く知られなかつたことで拜察し奉ることが出来る。これが陛下の御人格の崇高であらせられたと

ところで、御徳の深く國民の間に浸潤して行つたのも、この隠れた御心の自からなる働きであつたのだ。といふ意味のことを書いて居られる。

かういふ意味からも、先帝陛下が、國民の大なる父であらせられて、我々教育者にも、教育の眞意を、冥々の間に、御示しなされてゐると、申上げなければならぬ。

先帝陛下の御事を申上げた序に、私はここに是非述べて置きたいことがある。私は、數ある御製を拜誦した中で、とくに私の心に刻まれて私の生涯に希望と喜びとを御示し下されたものがある。これは平岩恒保氏の説教を聞いたときには、はじめて承はることの出来た、御製の一つであるが、多難であらせられた、陛下御自身の御生涯の心を御詠み遊ばされたものとして、拜誦することも出来、又轉變の多い人生に、希望と、信賴と、努力の光りを御與えなされたものと、拜察することも出来る

のである。寄撫子といふ題で

寄る波に打あげられて臥しながら

花咲きにけり河原撫子

といふのである。濱邊に、どうしてこぼれて来たか、一莖の撫子が生じた。すく／＼と生い立つてゐると、或るとき嵐が来て、潮を岸に捲きあげて、か弱い撫子は、その潮に根こそぎさらはれて、泡立つ波の中にもつて行かれてしまつた。それでも海中に藻屑となるのを免れて、また濱邊の砂の上に打あげられた。そこではもう立つことが出来ないで、倒れたまま、それでも根を其處において、太陽の輝く幾日かつづく間に、小さいながらも蕾をもつて、一生懸命の力で花を咲かすやうになつた。豊饒の畝地に培はれて育つた花とちがつて、倒れて曲んだ莖から出た花は、あてやかに榮あるものではなかつた。けれど、この淋しい濱邊に、あら

ん限りの天分の力を出して、撫子は其の花を咲かした。莖は倒れて地に匍ふてゐても、花は頭をもたげて、日の輝いてゐる空を仰いでゐる。

轉變の打續いた私の境遇を御詠じ下されてゐるやうな心地がした。果敢ない生涯に泣いてゐる、世の多くの民草のために、其の望みの喜びと其の爲すべきことを、御教へあそばしてゐるのだと思はれた。或は、陛下御自身の御述懐であらせられやう。それが同じ多難の生涯に苦んで、それでも頭をもたげてゐる、弱くして強い多くの民草の心にも、深い共鳴を起すのであつた。陛下は、世のつねなみの歌詠みであらせられたのではない。詩人であらせられたのだと、平岩氏は言はれたが、誰でもそれを首肯かないではゐられないであらう。

一四 教師の權威

獨り在るときには、氣儘のことにしておいて、生徒の前だからと云ふので、爲すこと言ふことに氣をつけたからとて、何にもなるものではなく、教師の云爲に表裏のあるといふことは、却りて悪い影響を生徒に及ぼすものである。けれど、教師であるといふ自覺心から、いつも自分の生活の上に努力と工夫とを加へて行くことは、大に爲すべきことである。見せかけの作爲は、虚偽で力がないけれども、心から爲すことであつたら、それが多少の無理を伴ふことがあつても、好い結果を教育の上にもたらすものである。けれどそれは最上でないことは云ふ迄もない。教育に最上のものは、教師が楽しんで之を爲すといふことである。自分は善を行つて居る。生徒の模範として、少しも恥かしくない行動をやつてゐるのだといふ、意識がある間は、教師の感化力は割合に弱いものである。自から爲すことを自から意識して、これを是認するのは、まだ本當の善といふことは出來ず、まして自から之を誇るやうなことがあつたら善は却つて惡に墮落してゆくのである。

教育に最上の事

教師が楽しんでやること

私が教員生活をはじめてから二三年の間、不如意からでもあつたが、私の生活は極めて質朴で、洋服などは、學生の時に着てゐたのを、破れ古びた儘用ひてゐた。それは人の目につく程であつた。私はそれを得意にしてゐた。私の無頓着な身なりに感心してくれる人があると、私は大に満足であつた。私は又勉強もした。學校を缺勤するといふやうな事も決してしなかつた。そしてそれは私の大なる誇りであつた、これを見よと云はんばかりの心もちで、人の中に立つてゐた。教育者はかうでなければならぬと思つて、意氣昂然としてゐた。派手なことをして怠けてゐ

質素の虚飾

教師の權威

るよりは、よかつたであらうけれど、私はまだ若かつたと云はなければならぬ。

力のなき
無理と不
自然

或る學校の校長は、卒業生の服装等が、次第に華美になつて行くのを憂へて、自からわざ／＼弊衣破帽を實行してゐた。けれど卒業生の服装は少しもその影響を蒙らないで、やはり華美を追ふて行つた。作爲から来る無理と不自然とは、力のないもので、稍もすると、却つて其の反動を生ずることもある。餘りに嚴格な家庭には、隠れて悪いことをするやうな子供が出来る。峻酷な規律は、往々放埒者を生み出す。不取締の中から、極端に眞面目な人間が出ることもある。天地間には、反動作用といふものがあつて、極端は必ず極端を生む。自然にして無理のないところにのみ、中庸を得たものが出来るのである。

教師にとりて、何よりも大事なものは、教師の威嚴である。權威であ

反動の法
則

教師の威
嚴

る、教師に權威が無くなつた時には、教育は零になつてしまふ。權威が失くなつた時に、生徒は教師の言に服従しなくなる。生徒間に統一が失くなつて、彼等は名々勝手に騒ぎ廻るやうになる。それを教師たることを笠に着て、叱りつけたり、暴力で壓えやうとすると、忽ち彼等は反抗の心を起す。かうして學校の威信が全く立たなくなる。生徒は惡意から、反抗を計畫して反抗するのではない。反抗しなければならぬやうに餘儀なくされるのである。生徒自身といへども、それをどうすることも出来ないのである。靜かに退いて考へた時には、悪いことだと氣はつくのだが、教師の前に出ると、又しても反抗せずには居られなくなる。教師は益々氣を苛つて、束縛と制裁とを加へやうとする。かうして教師と生徒との間に、越ゆべからざるギャップが生ずるのである。

生徒の前に、權威を維持しやうと努めたからとて、決して權威が成り

生徒は何
故に教師
に反抗す
るか